都留文科大学研究紀要　第99集（2024年３月）
The Tsuru University Review,　No.99（March, 2024）

古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究（27）
― W.イェーガーの『パイデイアー』に学ぶ ―

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (27):
Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑　　潤
HATA Jun

Ⅰ．本研究の課題と小論の対象・構成について

１．本研究の課題と経緯

本研究は、ドイツの古代学者であるW.イェーガー（1886 ～ 1961）の著書『パイデイアー―ギリシア的人間の人格形成―』（*PAIDEIA　DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*）のG.ハイエットによる英訳版『パイデイアー―ギリシア的教養の理念―』（*Paideia:The Ideals of Greek Culture*）から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究（26）（都留文科大学研究紀要第98集、2023年10月）に直接連続する。

２．小論の対象と構成

小論Ⅱ.は、『パイデイアー』第Ⅲ巻（第４編　The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato プラトーンの時代における教養理念の論争）の「6 Isocrates Defends his Paideia イソクラテースは自らのパイデイアーを弁護する」（132p~155p）の訳出と＜注記と考察＞で構成する。

そのⅡの後に≪原文注記≫を配し、続いてそれに対する＜注記と考察＞を記す。

３．テキストと論述の仕方など

イ）テキストは第Ⅲ巻（1944年版）を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一巻にまとめられた復刻版（1989年、初版：1973年）を用いている。

ロ）キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、英語とともに適宜ドイツ語も挿入し（格変化などは構文の類推可能性のことを考え原文中のまま扱っている）、その訳を付すようにした。また＜注記と考察＞などでギリシア古典からの訳文を引用する際に、そのなかの訳語を確認するためにギリシア語、英語を挿入する場合がある。それらは、とくに注記しない場合は、すべてローブクラシカルライブラリーに拠っている。

ハ）訳文中の一項目が複数段落になっている場合は、段落ごとに説明の小見出しを〖　〗という記号で付ける。つまり、項の見出しも段落ごとの小見出しも英訳版の区切りに基づき、私が便宜的に付したものである。その他のカッコの表記などは、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ）ハイエット訳で強調斜体になっている語を、本継続研究（25）より、日本語訳に「　」を付して表記する場合がある。

ホ）＜注記と考察＞における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究（5）と同様である。

４．本継続研究における訂正と補筆

[訂正について]（その16）

イ）本継続研究（22）の41頁の下から22行目に文字の重複がある（読者からの指摘があった）。（誤）『ヘーラクレレース論』→（正）『ヘーラクレース論』

５．本継続研究の表題中の文言「パイデイア」の変更

本継続研究の表題中の「パイデイア」を、論述の表記と一致させるために、「パイデイアー」とする。なおこの変更は、過去の継続研究に遡って適用するものとする。

Ⅱ．６イソクラテースは自らのパイデイアーを弁護する
（Isocrates Defends his Paideia, Isokrates verteidigt seine Paideia）

英訳版第Ⅲ巻、第 6 章：132p ～ 155p

８．イソクラテースは『アンティドシス（財産交換）』でプラトーンのアカデーメイアとの対抗心と同時にプラトーンの教養の理念への一定の譲歩も示しているが、古いソフィストたち（ソークラテース以前の哲学者たち）をまったく受け入れることはない。しかしその同じころにアカデーメイアにおいては古いソフィストたちは以前よりもむしろ大きな信望を得ていたのである

＜訳文＞146p ～ 148p

〖**イソクラテースの『アンティドシス（財産交換）』における自らのパイデイアーの弁護にはプラトーンのアカデーメイアへの対抗心があるが、論述のこの箇所にはとくに個人的な怨恨の傾向が潜んでいる。そこには、弁論術の授業を開いたアリストテレースとイソクラテースのその両名の弟子たちが争いを激化させるようなことを引き起こしていたと推量させるものがある。それでもイソクラテースは私的感情を抑えようとしており、教養（culture）についてのプラトーンの理念（ideal）に一定の譲歩をしようとしている。このことは、プラトーンが（『アンティドシス（財産交換）』の前に刊行されたと判断される）『パイドロス』をイソクラテースへの賛辞と彼の哲学的資質への敬意で締めくくっていることと関係があるだろう**〗このイソクラテースのパイデイアーの弁護は明らかに、一般の世論に対するというよりむしろ弁論術（rhetoric, der Rhetorik）に反対している他のパイデイアーの代表者たちに対抗することが目指されている。（事実また：denn auch）演説の結びの節であからさまに、彼のプラトーンのアカデーメイアへの対抗が露見する。彼はその構成員たちを特に一つの誤りで非難する：言論（the logos, des Logs）の力を誰よりもよく知っている、その彼らがそれにもかかわらずそれ〔=言論の力〕を、自分たち自身の種類の教育をより価値があるように見えさせようとして、無教育な者とまったく同様に徹底的にけなすのである。«106» ここ〔=（イソクラテースの論述のここ）〕には相当の私的感情がある；しかしイソクラテースは、彼はプラトーン派の哲学に対する嫌悪を秘密にしないのであるが、明らかにそれ〔=相当の私的感情〕を抑えたいと思っている。彼は、自分が彼らのことを辛辣に話すのは彼らが自分をそうするよりいっそうもっともだろう、と言う。し

かし彼は、嫉妬によってゆがめられた人間の水準にまで自らを落とそうと思わない。«107» これらのことばは単に、『ヘレネー頌』と『ソフィストたちを駁す』で十分に表明された、そのような弁論術と哲学の古い職業的な対抗意識から生じているのではない。それら〔=これらのことば〕は、説明がむつかしいものではない、そのような個人的な怨恨の傾向を隠している。アリストテレースがプラトーンのアカデーメイアにおける教師であったとき（つまりプラトーンが老齢のころ）、彼は弁論術（rhetoric, der Rhetorik）の授業（instruction, den Untericht）を導入した、という言い伝えがある。（しかもそのうえ：sogar）彼は、自分の講義（his lectures, seiner Rhetorikvorlesung）でエウリーピデースの一行をこんな風にもじった——

沈黙を守るなんて、そしてイソクラテースに語らせておくなんて、恥辱であろう！ (1) «108» 彼のコース（the course, diesen Kursen）を開く目的は、（ともかく：einmal）（聴講生の：der Hörer）正式な教育（formal education, einer formellen Bildung）への要求に応えることであった：彼は存在しているディアレクティケー（dialectic, der Dialektik）の諸コースを捕捉するために弁論術（rhetoric, der Rhetorik）の授業（instruction, der Unterricht）を加えていたのである。しかしそれは、弁論術をより科学的な基礎の上に置こうとする企てでもあった。«109» これら双方の理由で、彼のコース（course）はイソクラテースの学校を傷つけ、彼の憤りを引き起こしたに違いない。イソクラテースの弟子の一人であるケーピーソドーロス (2) は、アリストテレースに対抗する大きな論争的な全四巻の著作物を執筆したが、それは、証明するある証拠があって、彼がまだアカデーメイアで教えていたときに作成された。«110» アリストテレースは、非常に意地の悪い才知があったので、彼の新しい講義（his new lectures, seiner Neuerung 彼の革新）は、彼はしばしば権威者〔=イソクラテース〕の演説を模倣されるべき手本として引用したのに、おそらくイソクラテースに対するある辛辣な風刺を含んでいた。彼らの弟子たちはおそらく、争いを激化できそうなことをしたのだろう。それでもイソクラテースはここで、自分の論調を個人の感情を交えないように保とうとしており、また教養（culture）についてのプラトーンの理念（ideal）に一定の譲歩をする用意さえある。われわれは、このことを、アカデーメイアとの論争で彼の弟子たちとプラトーンの弟子たちとの間に生じていた苦しみを忘れようとする、またその大家（the master）に直接に話しかけようとする、そのような企てと理解しなければならない。プラトーンは、弁論術の授業（school-rhetoric）(3) 一般の自身の嫌悪にもかかわらず、自身の弁論術に関するもっともあたらしい著作『パイドロス』«111» を、イソクラテースへの賛辞と彼の哲学的資質（his philosophical nature, der philosophischen Ader des Isokrates）への敬意で、締めくくったのである。(4)

〖**イソクラテースは『アンティドシス（財産交換）』でプラトーンのアカデーメイアを意識し、理論的な研究の重要性の評価を変え、それが「知性」の鍛錬となり（イソクラテースが考える）「真の哲学」への準備になることを認める。そして若者がプラトーン学派の‘（いわゆる）哲学’に一時的に時間を費やすことは条件付きで望ましいと思うが、古いソフィストたち（ソークラテース以前の哲学者たち）の逆説的な論議は「いんちきの奇術的な技能」であり教科課程から完全に廃棄されるべきだとする。しかしその同じ年月の間に古いソフィストたちはアカデーメイアにおいて以前よりもむしろ大きな信望を得ていたのである**〗これは、イソクラテースが『アンティドシス』において論争を避けるやり方の最

良の説明である。«112» 彼が述べることは、プラトーンの、『パイドロス』おける彼〔=イソクラテース〕についての条件付きの賞讃、に対する適切な釣り合いを生み出している。彼は一定の譲歩をしている――というのは、彼は理論的な研究の重要性についての自分の評価を改めたのである。彼は今や、ディアレクティケー（ないし‘論争術（eristic, Eristik)’、彼がなおそう呼ぶことを固執するように）と天文学や幾何学のような数学的科学が若者を害することはなく、それらがもたらす有益さは彼らの教師たちが断言するほど大きなものではないのではあるが、彼らを益すると進んで認める。«113» このことで、彼は明らかにプラトーンのアカデーメイアを意味しているのであり、というのは、それ〔=プラトーンのアカデーメイア〕は以前からずっと（しかしプラトーンの最後の10年間においてはとくに）これら二つの科目（subjects, des Unterrichts 授業）を合わせて教えることで名高かったのである。«114» ‘たいていの人’は（もちろん：freilich)、彼は言う、それらはその価値を実際の生活の中に見出すことができないので、それらは些末論議（hair-splitting, Mikrologie 微細学）であり駄弁（verbiage, müßiges Geschwätz 無益なおしゃべり）であると思っている。«115» われわれは彼自身がその見解を初期の著作でいかに表現しているかを想い起してよいのであり、そしてまさにそれらの言葉を現に彼がプラトーンを攻撃するのに使ったのである。«116» 今や彼〔=イソクラテース〕は守勢である；また、おそらく、彼は物事を異なる視点から考察する仕方を学んだのである。彼は、論理学の、数学の研究は、彼はまだそれらの実践における無益性を強調しているけれども、知的な教育において少なからぬ価値があると認めるのをいとわない。«117» もちろん、彼は言う、その種の教養（that kind of culture, diese rein begrifflich‐logische Bildung）は*philosophy*と呼ばれるべきではない、というのは、それは当をえた弁論も適切な行動も導かないからである；しかしそれは知性（the intellect, der Seele魂）の鍛錬となり、また真の哲学――つまり、政治、弁論術の教育（political and thetorical education, der politisch-rhetorischen Bildung）――への準備となる。«118» それゆえにそれ〔=その種の教養〕は、同じ目的にかなう、そして生徒をより重要でより深刻な問題（subjects, Fragen）を学べるようにする、そのような文学（literature, Grammatik 文法)、音楽（music, Musik)、そして詩歌（poetry, Poesie）と同類である。«119» 彼〔=イソクラテース〕は、プラトーンの『ゴルギアース』におけるカルリクレースのように、若者がプラトーン学派のあの‘（いわゆる：sogenannten）哲学’に（一時的に：zeitweilige）時間を費やすことは、彼らの才能がそれによって枯渇されたり化石化されたりしないという、«120» また彼らが古いソフィストたち（彼はソークラテース以前の哲学者たちのことを言っている）の逆説的な論議に座礁しないという、そのような条件で、望ましいと思う。これらの、ばか者たちによってのみ賞讃される、いんちきの奇術的な技能（juggling tricks, diese Taschenspielerkünste）は、教科課程から完全に廃棄されるべきである。«121» しかし、（まさに：gerade）この同じ年月の間に、彼ら〔=古いソフィストたち〕は、プラトーンの『パルメニデース (5)』と『テアイテートス (6)』と彼〔=プラトーン〕の弟子たちの諸著作から明らかなように、アカデーメイアにおいて以前よりもむしろより大きな信望を得ていた。それゆえにイソクラテースの最後の鋭い批判 (7) さえも、実際にはアカデーメイアへの当てこすりであった。(8) 彼〔=イソクラテース〕はいつも、存在と自然についての形而上学的な理論化（theorizing, Spekulation 思弁）（エンペドクレース、(9) パルメニデース、メリッソス (10) 等の名で代表される）は、単なるうぬぼれ（vanity, eine Torheit）であり精神をい

らいらさせること（vexation of spirit, ein Ärgernis 愚行）だと感じた。«122»

＜注記と考察＞

(1) この訳文に対応する英文（独文）は下記のとおりである。

'Twere shame to hold our peace, and let Isocrates speak!

（Es wäre schimpflich, zu schweigen und Isokrates reden zu lassen.）

(2) ケーピーソドーロス（前 4 世紀）は、松永著では「イソクラテースの傑出した弟子で、プラトーンを攻撃した雄弁家」と説明されている。

(3)「弁論術の授業」は school-rhetoric の仮訳である。なおイソクラテースが弁論術の学校を開いたのは（前）392年である。

(4) ここで問題とされているのは『パイドロス』の末尾のことである。すでにイェーガーは、『パイドロス』末尾における「イソクラテースへの賛辞と彼の哲学的資質（his philosophical nature, der philosophischen Ader des Isokrates）への敬意」は「明らかな範囲内において、それ〔=この評言〕はまったく事実に合致している」、と述べている（本継続研究（18）Ⅱ．6，論文ページ187）。

『パイドロス』の該当箇所は本継続研究（18）Ⅱ．6の＜注記と考察＞（3）（論文ページ191 ～ 192）で引いているが、イェーガーの論述を理解するために改めて以下に引いておく（藤沢訳、岩波文庫）。

パイドロス　それであなたは？どうなさるおつもりなのですか。あなたの親しい人にだって、知らぬ顔をしているという法はないではありませんか。

ソクラテス　誰のことかね、それは？

パイドロス　あの優秀な人物、イソクラテス*です。あの男には、どんなことを伝えるおつもりですか、ソクラテス。私たちは彼を、どういう人間であると言うべきでしょうか。

ソクラテス　イソクラテスはまだ若年の身ではないか、パイドロス。でも、ぼくが彼についてその将来を占うところを、話してあげてもよいよ。

パイドロス　どのように占われますか。

ソクラテス　ぼくの思うところでは、彼イソクラテスは、そのもって生れた素質（τῆς φύσεως, a nature）において、リュシアス流の弁論の水準をはるかに抜いてすぐれているし、その上、人がらも一段と高貴なところがあるようだ。だから、いまに年齢が進むにつれて、もし、彼が現在手がけている専門の言論そのものの領域で頭角をあらわし、かつて言論にたずさわった人たちとくらべて、大人と子供以上の差をつけたとしても、べつに驚くにはあたらないだろう。のみならず、さらに、彼がそれだけの業績に満足できずに、より崇高なある種の衝動にみちびかれて、もっと偉大なものに到達したとしても、それはじゅうぶんうなずけることだ。なぜかというと、あの男の精神（διανοία, his mind）には、友よ、知に対するひとつの切実な欲求（τις φιλοσοφία, something of philosophy）が、生まれつき宿っているのだから。――さあそれでは、ぼくはこれだけのことを、この土地にすむ神々からおくられた言葉として、わが愛する若者イソクラテスに伝えよう。君のほうは君の愛するリュシアスに、さっきのことを伝えたまえ。

*ここには長文の訳注が付されている。訳者（藤沢）による充実した論稿というべきものであり、プラトーンとイソクラテースとの関係や上記引用箇所の意味合いなどを理解していく上での基本的案内になっている。

なおイェーガーの論述のこの箇所は（〔**ドイツ語版の叙述を圧縮したものとなっている**〕）、次の段落につながって、上記藤沢訳注に対応するイェーガーの（根拠のある）「解釈」となっている。そこでイェーガーは、『アンティドシス（財産交換）』を『パイドロス』と対照しており、またイソクラテースの「企て」――プラトーンの弟子たちとイソクラテースの弟子たちとの間に生じていた「苦しみ」を忘れようとする――を想定しており、これらのことは藤沢訳注にはない知見として注目される。

(5) パルメニデース：前515/510頃～前450以降、あるいは、前540/535頃～前483/475頃。ギリシアの哲学者でエレアー学派の祖、形而上学の父であり、松原著には次のような説明がある。

> ･･･上品で端麗な容姿の持ち主で、政治家としても活動し、エレアー市民のために法律を制定、彼とその弟子ゼーノーン（エレアーの）のおかげでエレアーの町は善く治められたといわれる。パルメニデースは「在るものは在り、無いものは無い」という命題から出発して、厳密な演繹を行ない、「在るもの」は永遠に不生不滅・不変不動・不可分で等質の完結した球体であると主張。生成消滅を説くイオーニアー派の自然哲学（タレース、アナクシマンドロス、アナクシメネースらのミーレートス学派）やヘーラクレイトスの「万物流転」説を斥け、理性のみが真理の基準であり、感覚で捉え得るものは虚偽であるとした。･･･また彼は「アキッレウスは亀に追いつけない」という議論を最初に問題提起した人だとされ、その論説は彼の弟子で愛人（稚児）でもあったゼーノーンによってさらに有名となった。前450年頃、養子に迎えたゼーノーンを伴ってアテーナイを訪れ、若きソークラテースらに深い感銘を与えた。プラトーンによれば、後年ソークラテースは、パルメニデースを「あらゆる点で高貴な深さを湛えた人」「尊敬すべき、また畏怖すべき人」であった、と述懐している。パルメニデースはひとり独自のエレアー学派を確立したというに留まらず、その鋭い論理的思考によって当時の思想界に鮮烈な衝撃を与え、以後のギリシア哲学に影響するところ甚大であった。また初めて地球が球形であると宣言し、月がその明るい面をつねに太陽に向けていることを観測したという。･･･

(6) テアイテートス：前414頃～前369。ギリシアの数学者でアテーナイの人。松原著には次のような説明がある。

> ･･･ソークラテースとも交流があり、プラトーンの対話篇『テアイテートス』『ソフィスト（ソピステース）』に話者として登場、哲学はアカデーメイアでプラトーンに学んだ。エウクレイデースの『幾何学原論』第10巻の資料となった無理数の理論を発展させた功績で知られる。コリントス近郊の戦闘で勇敢に戦って負傷し、痢病に苦しんで死んだという。

(7)「イソクラテースの最後の鋭い批判」とは、原文注記≪120≫とそこの＜注記と考察＞（17）に拠れば、『パンアテーナイア祭演説』27, 28のことと判断される。

(8)〔**ドイツ語版では、この箇所に次の一文が入っている**〕

精神の体操（die Gymnastik des Geistes）のためのプラトーンのディアレクティケーや数

学の価値は、イソクラテースは必要とあればかろうじて認めることができる。しかし（doch）・・・

（9）エンペドクレース：前495/490頃～前435/430頃。ギリシアの哲学者、詩人、政治家、神秘宗教家で、松原著には次のような説明がある。

「シケリアー（現・シチリア）島のアクラガース（アグリゲントゥム）市に生まれる。名門の出身だったが父親と同様、僭主政治の打倒と民主政の維持のために闘い、王位を捧げられても拒絶、・・・」「イタリアの医学派の創設者とも見なされている。哲学はピュータゴラースまたはパルメニデースに学んだとされ、輪廻転生を唱えて肉食と生殖と豆を断つように警告、・・・また万物は地・水・火・風の 4 元素の混合からなり、「愛」と「憎」の 2 力により結合と分離が起こると説明。叙事詩の韻律たるヘクサメトロス調で『自然について（ペリ・ピュセオース） Peri Physeos, Περὶ Φυσέως 』と『浄化（カタルモイ） Katharmoi, Καθαρμοί』を執筆したが、今日ではそれらの断片のみが伝存するに過ぎない。優れた雄弁家でもあり、ソフィストのゴルギアースも彼に師事したといい、アリストテレースからは「弁論術（レートリケー） Rhetorike, ‘Ρητορική の発明者」と呼ばれている。・・・」

（10）メリッソス：前490頃～前430頃。エレアー派の哲学者。後記≪原文注記≫の＜注記と考察＞（24）を参照のこと。

9．イソクラテースは、プラトーンの教育についての哲学的研究を意識し、またプラトーンによる弁論術教育の批判に応えるように、自らのパイデイアーの本質認識を論述していく。しかしイソクラテースの純粋に現実的な精神は、プラトーンにとって教育が現実に可能であるという証拠である、絶対的な道徳的規範の明晰な洞察力に届くほど高く舞い上がることは決してなかった

＜訳文＞148p ～ 152p

〖**イソクラテースは真のパイデイアーの本質の定義に向かうが、その彼の思考はその偉大な敵対者プラトーンの教育（education）についての哲学的研究に負っていた。プラトーンにとっては高い水準の徳と教養（areté and paideia）が本能やインスピレーションによってもたらされる成功の向こうに在る（lies）のに反して、イソクラテースは熟慮して、根源的な懐疑から、自分の教育（teaching）を思わく（opinion）や意見（belief）の領域に限定した**〗今やついにイソクラテースは、真のパイデイアーの本質（the nature of true paideia, das Wesen der wahren Bildung）を定義することに、そしてそれを、誤った、ないし生半可な教養と対照することに、向かう。しかし正にこの点で、彼の思考がいかに多くをその偉大な敵対者に負っているかが明らかになる。プラトーンの教育（education, Erziehung des Menschen）についての哲学的研究は、主要な諸問題を非常にはっきりと明るみに出したので、イソクラテースは自分の意見の相違を、（無意識的に：unwillkürlich）プラトーンが述べたことを単に否定することによって述べさせられている。教育とは何で「ある」のか（What *is* education, Was ist also Menschenbildung）――いやむしろ哲学とは何で「ある」のか（what is philosophy, „Philosophie“（真の意味で、純理的なプラトーン的な意味ではなく）？ もう一度（ここで：hier）彼は、自分の初期の著作の部分をとり上げ、そのことを明瞭にしようと努力する。«123» 彼にとって決定的な点は、人間の本性（human

nature, der menschlichen Natur）はわれわれが為すべき、語るべきことについての真の知識（a real science, eine eigentliche Wissenschaft）（プラトーンが*epistémé*（知識）[1] という言葉に用いる厳密な意味において）を獲得することは不可能である、ということである。（ついでながら、イソクラテーはいつも語ることと行為することを結合して考えているということを忘れないように。）それゆえに、（彼にとっては：für ihn）ただ一つの知恵（wisdom, Weisheit）（σοφία）[2] があるだけである。その本質は、たいていの場合に人間にとって最善であるものを、単に臆断（opinion, Meinung）（δόξα）[3] を用いることによって獲得することである。だからわれわれは‘哲学者（philosopher, Philosoph’という名称を、この実践的な知恵（this practical wisdom）ないし*phronésis*（思慮）[4] を得られるようなことがらを研究する者に適用すべきである。«124» イソクラテースは、τὸ φρονεῖν（善悪の知識）[5] を人間の教育と教養（human education and culture, der philosophischen Bildung des Menschen）の目的であり要約であると思うことではプラトーンに一致しているように見える。しかし彼はそれ〔=το φρονειν（善悪の知識）〕に、それがソークラテース以前のギリシアの倫理的思考にもっていた（純粋に：rein）実践的な（practical, praktische）解釈、を与えると言ってきかない。彼はそれからその抽象的で理論的な意味のすべてを取り除く。今やそれは、プラトーン的な意味における、徳（virtue, der Tugend）の、あるいは善（Good, des Guten）の知識（knowledge, Erkenntnis）を含まないのであり、というのはイソクラテースによればそのような知識は不可能であるから――あるいは少なくとも人間にとっては不可能であるから。«125» このことは、わたしたちはプラトーンの『ゴルギアース』で勧告されているような――プラトーンによって『国家』で論証されているように、あの善の知識（that knowledge of the Good, dieses absolute Wissen des Guten）に基礎づけられている――政治の技術（an art of politics, einer politischen Techne）というものを得ようと努力してはいけない、ということを意味している。プラトーンは『ゴルギアース』で、過去の偉大な政治家たちをこの技術によって提供される確かな基準をもっていないことで厳しく非難した（censured, der Tadel）のだった。しかしイソクラテースはその非難（that accusation）は、非難する者（the accuser, den Tadler）にはね返って来ると考えるのであり、なぜならその者は、人びとが超人的な基準に一致するように要求し、そしてそれによって彼らの中の最高の人たちを不当に非難するのである。後にプラトーンは『メノーン』で、これらの著名な（famous, gefeierten賞讃される）政治家たちの徳はちゃんとした知識（real knowledge, wirklichem Wissen）によってではなく、‘神の恵’（θεία μοίρα）[6] によって彼らに与えられる正しい思わく(right opinion, richtiger Meinung) [7] によってのみ生み出される、と言った――そうしてそのこと〔=（手前のプラトーンが『メノーン』で述べた言葉）〕をイソクラテースは、人間というもの（a mortal, einem Sterblichen死すべきもの）が獲得できる最高の賛辞だと考えたであろう。«126» プラトーンにとっては高い水準の徳と教養（areté and paideia, der Arete und Paideia）が本能やインスピレーションによってもたらされる成功の向こうに在る（lies, beginnt）のに反して、イソクラテースは熟慮して、根源的な懐疑から、自分の教育（teaching, die Erziehung）を思わく（opinion, der bloßen Meinung）や意見（belief, des Dafürhaltens）[8] の領域に限定した。彼は、正しい思わく（right opinion, die richtige Meinung）は厳密な知識（exact knowledge, des exakteren Wissens）のではなく、天賦の才（genius, das Genies）――そのもの〔＝天賦の才〕は説明できず、また教育によって

生み出すことはできない（could not be produced by teaching, nicht gezüchtet werden kann）——の部分であると考えた。

〖**イソクラテースはプラトーンの弁証法の形式的な訓練としての教育的価値は認める用意がある。しかしイソクラテースの純粋に現実的な精神は、プラトーンにとって教育が現実に可能であるという証拠である、絶対的な道徳的規範の明晰な洞察力に届くほど高く舞い上がることは決してなかった。彼は、プラトーンの高尚なパイデイアーの概念を広い適用性の基準で判断し、それ〔=プラトーンの高尚なパイデイアーの概念〕は大部分の人たちに授けられ得ないので、それは幻想であると断定した**〗彼は、プラトーンとソークラテースはパイデイアーの力を過大評価することを主張していると感じた。彼が、その敵対者たちを素質のよくない人たちにさえ徳と正義を習得させると公言するかどで非難するほど公平さを欠いていたのは、そういう理由である。«127» 彼の知的な限界がもっとも明瞭に見られるのは、彼のプラトーンのパイデイアーの理論（Plato′s theory of paideia, der platonischen Art der Paideia）に対する批判においてである。彼の、弁証法（dialectic, der Dialektik）の細事にこだわる抽象概念の嫌悪にもかかわらず、彼はその形式的な訓練としての教育的価値（its educational value as formal training, ihren Wert als formales Bildungsmittel）を認める用意がある；また彼は結局数学に対しても、それ〔=数学〕は彼の‘philology’（言論好き）の概念から（弁証法からよりも：als Dialektik）さらに隔たってさえいたのであるが、同じこと（the same, das gleiche Zugeständnis同じ譲歩）をするに至った。«128» しかし他方彼は、弁証法によってもたらされる知的な浄めや浄化（the intellectual cleansing and purification, der geistigen Reinigung知的な純化）と引き続いて起こる魂の倫理的再生（the moral regeneration of the soul which followed, dem Durchbruch des Sittlichen in der Seele）との関係をまったく理解できなかった；そうして彼の純粋に現実的な精神（his purely practical mind, sein rein aufs Praktische gerichteter Sinn）は、（その〔=彼の純粋に現実的な精神の〕限界を超えて：über diese Grenze）、プラトーンにとって教育（education, einer höheren Erziehung des Menschen人間の高度な教育）が現実に（actually）可能であるという証拠である、絶対的な道徳的規範の明晰な洞察力（the clear vision of absolute standards, der mystischen Klarheit der intellektualen Anschauung einer absoluten Norm）に届くほど高く舞い上がることは決してなかった。彼は、プラトーンの高尚なパイデイアーの概念（conception, Auffassung）を、広い適用性の基準で判断した：それ〔=プラトーンの高尚なパイデイアーの概念〕は大部分の人たちに授けられ得ないので、それは、と彼は断定した、幻想である。(9) 彼の究極の基準はいつも普通の常識（ordinary common sense, der gesunde Menschenverstand良識）である；そうしてその基準によって判断すれば、プラトーンの、絶対的なイデアー（the absolute Ideas, jener absoluten Idee）を国政と教育の現実（the realities of state and education, der sittlichen und erzieherischen Aufgabe）と合体させようとする大胆な企ては、単に幻影 (10) に見えるにちがいない。«129»

〖**プラトーンは弁論術を、その専門家たちをpleonexia（„Pleonexie“）——利己的な貪欲、あらゆる衝動を満足させること——に導くことで非難していたのであり、なぜならそれ〔=弁論術〕は内在する倫理的目的をもたない単なる手段だからである。イソクラテースはこの非難をとりあげ、それによって改めて、彼の真の教育の定義はあらゆる点でプラトーンへの答えであることを明らかにする。つまり彼は、倫理的、知的教養**

（culture）の高い目的に到達しようとする努力は、自分自身のための力と所有物（power and possessions for one's own self）を蓄積したいという根本的な衝動の真の、本物の実現のことであると、さらにこの理論は自分の学校の生徒になっている若者たちに実現されていると、言明する〕しかし、アカデーメイアが弁論術にその時払っていた注意は、彼にとって、それ〔=弁論術〕が生み出した彼の学校に対する批判とはまったく離れて、実際的な興味を起こさせるものをもっていたに違いない。アカデーメイアは、弁論術をとりあげることに関しては、言葉の使用における注意深い訓練が不可欠であると承認していた。そしておそらく、彼に『アンティドシス（財産交換）』で、そうでなければ説明がむつかしい、これらの言葉〔=（以下の引用文）〕を書かせたのはあの承認であった：'倫理的な教育［プラトーンによって述べられているような種類の］に忙しくしている者は、もし彼らが上手に話したいと熱望するようになり（they became ambitious to speak well, sie sich mehr der Rhetorik widmeten）、説得の技術に恋をする（fell in love [*eros*] with the art of persuasion, ihr „Eros" die Richtung auf die Kunst der Überredung nähme）のなら、すぐれた人間になり得るだろう'。(11) «130» この点で、彼は単に知的な鍛錬のことだけではなく、倫理的な性格（the moral character, des sittlichen Charakters）をよくすることも考えているようだ。なるほど（indeed, zwar）、彼が述べてきているように、徳に導く絶対確実な知識（infallible knowledge, ein unfehlbares Wissen）というものは存在しない――しかし（but, aber）、全体の性向（the whole nature, das ganze Wesen des Menschen全体の人柄）が、ふさわしい研究の対象に専念することによって、変化させられ、徐々に思わず知らず向上させられるということは可能である。つまり、そうしたことをもたらすことができるのが（まさに：gerade）弁論術教育（rhetorical education, die rhetorische Bildung）なのである。«131»（だから：also）イソクラテースによれば、プラトーンは、それ〔=弁論術教育〕を（それ自体：an sich）倫理的に中立でありあるいは悪用される傾向さえあると見なしていることにおいて、その〔=弁論術教育の〕真の性質（its true character, die Wirkung der wahren Rhetorik真の弁論術の効果）をまったく誤認している。それ〔=弁論術教育〕は、以前は弁論術教育（rherorical training, dem rhetorischen Unterricht）の主題であった個人的な商売の利益にではなく、全社会にかかわる偉大な高貴なことがらに関係している。それが注意を向ける行為は、もっとも適切で有益であり（the most fitting and salutary, die geziemendsten und heilsamsten）、そのようなことがらを熟考し評価することに慣れている（is accustomed to, zur zweiten Natur geworden ist第二の天性となっている）雄弁家（the speaker, der Redende）は、考慮中の主題についてだけではなくあらゆる行為について、適切に考え弁論をする能力を獲得するはずである：そうしてその能力は雄弁術（the oratorical art, der Redekunst）の真剣な研究の当然の結果である(11a)。«132» イソクラテースは、雄弁家の仕事は、説得力のある演説を作成するという、また必要な技術的な予備の手段を修得するという抽象的なもの（すなわち説得の技術で使われるさまざまな装置）ではなく、むしろ他者に自分の人格の力を感じさせること（make others feel the power of his personality, seiner Selbstmitteilung als Charakter）だと主張する。というのは、言葉の背後の人格（the personality, die Persönlichkeit）は弁論をほんとうになるほどと思わせるものである。«133»プラトーンは弁論術を、その専門家たちを*pleonexia*（„Pleonexie"）(12) ――利己的な貪欲、あらゆる衝動を満足させること――に導くことで非難していたのであり、なぜならそれ〔=弁論術〕は内在する倫理的目的を

もたない単なる手段だからである。«134» イソクラテースはこの非難をとりあげ、それによって改めて、彼の真の教育の（本質：des Wesens）定義はあらゆる点でプラトーンへの答えであることを明らかにする。«135» 彼〔=イソクラテース〕は、『平和演説』においてアテーナイ帝国主義者たちの権力政治（the power-politics, der Machtidee）に反対して論議するとき、注意深く彼らの‘aggrandisement（勢力、富、重要さなどの）増大’（ihr Sterben nach mehr als solches）をひとまとめにして非難しないように、彼らが根本的な人間の本能（a fundamental human instinct, diesen Grundtrieb im grob materiellen Sinne）を誤解しており、それゆえに深刻に間違っているということを指摘するように、気をつけていたのである。«136» 彼がそこで〔=（『平和演説』の該当箇所で）〕国家のための適切な政策（policy, die Politik）として力説していたことを、彼は今や（『アンティドシス（財産交換）』で：in der, Antidosisrede'）個人の正しい目的（the right aim of the individual, Forderung an die individuelle Persönlichkeit）として力説する。以前の演説では、彼は倫理的な征服という政策（a policy of moral conquest, sine Politik der moralischen Eroberungen）と厳格な公正さが唯一の真のプレオネクシアー（pleonexia, Pleonexie 貪欲）だと主張していた；そしてここでは、プラトーンのプレオネクシアーと不公正さおよび暴力性との同一視を退け、そのようなプレオネクシアーは、それを実践する人たちを真には益しないと主張する。これは、正直は最良の策である（honesty is the best policy, dem Nutzen der Gerechtigkeit）という古いギリシア人の信念への回帰である。彼は、倫理的、知的教養（culture, Kultur）の高い目的に到達しようとする努力は、自分自身のための力と所有物（power and possessions for one's own self, Selbstbereicherung und Selbststeigerung des Ichs 自分自身の自己利得と自己増大）を蓄積したいという根本的な衝動（the basic impulse, jenes Urtriebs 根源的欲求）の真の、本物の実現のこと（fulfilment, Erfüllung）である、と言明する。(13) 今日いわゆる哲学者たちが哲学（philosophy, Philosopie）と呼んでいるものは、実際には哲学ではない；そうして同様に、彼らが弁論術の邪悪な果実だと非難しているものは、本当のプレオネクシアー（貪欲）ではない。真の哲学であり教養（culture, Geistesbildung 知的教養）である、そのような本物の弁論術は、（実際に：auch）、強欲（greed, Lust）、窃盗（theft, Raub）、そして暴力（violence, Gewalttat）によって達成されるものよりも、水準の高い種類の自己を豊かにすること（self-enrichment, der Selbstbereicherung）に――人格の教養（the culture of the personality, Kultur der Persönlichkeit）、すなわちそれ〔=人格〕に内在する目的であるもの、に――通じている。«137» イソクラテースは、この理論は自分の学校の生徒になっている若者たちに実現されていると言明し、また彼は、彼らと彼らの熱心な学業を、自分たちの能力（their energies, ihre Kraft）を飲酒、ギャンブル、そして肉慾に浪費する無教養なアテーナイの若者たち、その彼らによって為される無制限の放蕩と対照させる。«138»

〖イソクラテースは哲学者たちの中傷を論駁することからデマゴーグたちの政治的な誹謗を論駁することにいつのまにか紛れ込んでいく。その結果イソクラテースは、自分自身の教育を、アテーナイ国民の真の本質と使命との関連で吟味することにより弁明できると考える。イソクラテースはいつも弁論術を、（精神的）文明の基礎にある本能の精髄、つまり‘philology’、言論好き（the love of the logos）、と見做してきていた。今や、アテーナイにおける政治の指導者も大衆も、しばしば言論（the logos）を軽蔑し、知的な教養（intellectual culture）を憎悪しているのであり、このような堕落の兆候を、彼はア

テーナイらしさを失わせることがらだと思い、アテーナイの精神を思い起こさせようとする〕イソクラテースは、自分の教育体系に浴びせられる批判の二つの原因を提案する：間違っている教育者たち（つまり哲学者たち：philosophers, der Philosophen）の中傷とデマゴーグたちの政治的な誹謗。（アテーナイでは）人びとは若者たちを政治的に無害な、無批判な状態に引き留めていたので、彼が、アテーナイでは人びとは若者たちに勤勉に勉強や仕事をしてもらうよりもむしろ時間を浪費してもらいたかったのだと苦情を言うとき、彼はいつのまにか第一のものを論駁することから第二のものを論駁することに紛れ込んでいるのである。(14) この論評は、自分自身の教育の弁明を、アテーナイ国民の真の本質と使命（the real nature and mission, des wahren Wesens und der wahren Aufgaben）に関してそれ〔=自分自身の教育〕を吟味することで終える気にさせる。彼は、かつて『民族祭典演説』で、アテーナイはすべての高度の学問教養（all higher culture, aller höheren Kultur）の故郷であり、そこからギリシア精神（the Greek spirit, der griechischer Geist）が全世界に流れ出ると、そしてアテーナイはその弟子たちを他の国家を教えるために送り出してきていると、そう述べることをアテーナイの最高の賛辞だと考えていた。«139» 今や彼はその考えを、弁論術は国民（the nation, nationale）に必要かつきわめて重要であるという決定的な証明へと転換する。彼はいつも弁論術を、（精神的）文明 (15) の基礎にある本能の精髄（the quintessence of the instinct which is at the basis of civilization, die eigentliche Verkörperung des kulturschöpferischen Urtriebs）、つまり‘philology’（„Philologie“）、(16) 言論好き（the love of the logos, der Liebe zum Logos）、と見做してきていた。«140» 今や、アテーナイにおける政治の指導者も大衆も、しばしば言論（the logos, zum Logos）を軽蔑し、知的な教養（intellectual culture, die Bildung des Geistes）を憎悪する；そうしてこの堕落の兆候を、彼はアテーナイらしさを失わせる（un-Athenian, unathenische）ことがらだと思う。これは、もちろん、曖昧な叙述であり、そうしてだれも‘un-Athenian’を随意に解することができるだろう；それにもかかわらず真のアテーナイらしさにはある客観的な基準がある。アテーナイの世界史への本質的で恒久不変の貢献は、全ギリシア人の見るところでは、その〔=アテーナイの〕教養（its culture, seine Kultur）だったのである。«141» もしアテーナイ人がもはやそのこと〔=（前文の内容）〕をはっきりと理解できないほどに落ちぶれていたのだとすれば、あらゆる国家でアテーナイの名声を維持していることがら――アテーナイの精神（the Athenian spirit, den athenischen Geist）――を、彼らに思い起こさせる時であった。まさか、彼は尋ねる、人びと（the people, das Volk）が、無法な乱暴な煽動政治家たち（demagogues, Demagogen）――自分たち〔=人びと〕を自分たちの隣国人の多くによって嫌悪されるようにしてきた者たち――が真の教養（culture, der Kultur）の保持者たち――出会うすべての人びとをアテーナイに対する愛情で満たす者たち――よりも自分たち〔=（人びと）〕をいっそう愛するし、また自分たちにいっそう有用だ、と信じるなんてことはあり得ないでしょうね？もしアテーナイ人が知的教養（intellectual culture, geistigen Bildung）の指導者たちを罰するとすれば、彼らは、まるでスパルター人が軍事訓練をする者たち皆を罰しなければならないかのように、あるいはテッサリアー人が騎馬の術に携わる者すべてを刑に処さなければならないかのように、同じようにふるまっているのである。«142»

＜注記と考察＞

（1）ἐπιστήμη①通暁していること、熟練。②知っていること、知、知識、学知、学問.

（2）σοφιᾱには「技術・技芸に秀でていること」「熟知」「知恵」「知識」「学識」といった意味がある。

（3）δόξα①（主観的な）考え、意見、臆断、②表象、幻影、③評判、名誉.

（4）φρόνησις①意図、考え、②思慮、知、知恵、賢慮.

（5）（善悪の知識）は、英訳版で挿入された（the knowledge of good and evil）の訳であり、したがって此処は「思慮（善悪の知識）」ということになる。

（6）『メノーン』の最後のソークラテースの語りで θεία μοίρα のことが言われている。その語りは下記のとおりである（藤沢訳、岩波文庫）。

ソクラテス　それでは、メノン、これまでの推論にしたがうかぎり、徳というものは、もし徳が誰かにそなわるとすれば、それは明らかに、神の恵み（θεία μοίρα, a divine dispensation）によってそなわるのだということになる。しかしながら、これについてほんとうに明確なことは、いかにして徳が人間にそなわるようになるかということよりも先に、徳それ自体はそもそも何であるかという問を手がけてこそ、はじめてわれわれは知ることができるだろう。･･･（以下略）･･･

（7）『メノーン』のほぼ末尾で「正しい思わく」のことが述べられている。重要な内容なので、やや長くなるが、97A ～ Cを以下に引いておく（藤沢訳、岩波文庫）。なお『メノーン』における「知」と「正しい思わく」については、拙論「想起に関する研究――社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて――」（都留文科大学大学院紀要第 7 集、2003年 3 月、所収）で考察を試みている。

ソクラテス　しかし、正しく導く（ὀρθῶς ἡγεῖσθαι, right guidance）ということは、「知（φρόνιμος, knowledge）」がなければできないということ、これにわれわれが同意したのは、どうやら正しくなかったようだ。

メノン　いったい、どうしてですか？

ソクラテス　それをこれから説明してみよう。――もし誰かが、ラリサでもほかのどこでもよいが、そこへ行く道をちゃんと知っていて歩きながら、ほかの人々を導いて行くとするならば、むろんその人は正しく、よく導くことになるだろうね？

メノン　たしかに。

ソクラテス　では、こういう場合はどうだろう。ある人が、その道を実際に通ったことがなく、ちゃんとした知識をもっているわけでもないが、しかしどの道を行けばよいかを見当をつけて、その思わく（思いなし）が正しかった（ὀρθῶς μὲν δοξάζων, a right opinion）ような場合は？そういう人もやはり、正しく導くのではないだろうか？

メノン　たしかに。

ソクラテス　そして、おそらくそのような人は、他方の者が知識（ἐπιστήμην, really knows）のかたちで把握している事柄について正しい思わく（ὀρθὴν δόξαν, right opinion）をもっているかぎりは、知ってはいないが思うところが真実（μὲν ἀληθῆ, the truth）をついているというその状態のままで、導き手としてはすこしも劣るところがないのだ――それをちゃんと知っている人とくらべて

もね。

メノン　たしかに、すこしも劣らないわけですね。

ソクラテス　してみると、行為の正しさということに観点をおくなら（πρὸς ὀρθότητα πράξεως, to rightness of action）、正しい思わくは、導き手として「知（φρονήσεως, knowledge）」に何ら劣るものではないことになる。そしてこの点こそ、われわれがさっき、徳とはいかなるものか（τῆς ἀρετῆς, the nature of virtue）を考察するにあたって、見のがしていたことなのだ。われわれは、正しい行為を導くのはただ「知」だけだと言っていたのだから。実際にはしかし、正しい思わくもまたそうだったのだ。

メノン　たしかにそのようですね。

ソクラテス　とすると、有益である（ὠφέλιμόν, useful）という点にかけては、正しい思わくは、知識に何ら劣らないわけなのだ。

メノン　しかし、ソクラテス、これだけの差はあるでしょう。つまり、知識をもっている者はつねに成功するけれども、正しい思わくをもつ者のほうは、うまくいくときと、そうでないときがあるという点です。

ソクラテス　どうして？つねに正しい思わくをもっている者は、いやしくもその思う（δοξάζοι, opines）ところが正しいあいだは、つねにうまくいくのではないかね。

(8) ここのイェーガーの叙述は、≪原文注記≫123 ～ 125で指示されている『アンティドシス（財産交換）』271の内容のことをさしていると思われる。その271は下記のとおりである（≪原文注記≫に対応する＜注記と考察＞（32）でも引いている）。

271 これについての私の理解は、ある意味でまったく単純なものである。すなわち、人間の本性（τῇ φύσει τῇ τῶν ἀνθρώπων, the nature of man）は、それをもつことによって何を語るべきか、また何をなすべきかを知る知識（ἐπιστήμην, a science）を獲得しうるものでなく、したがって私は残された可能性から結論して、臆断（ταῖς δόξαις, his power of conjecture）によって概してほとんどの場合に最善を狙い当てることのできる者を「知者（σοφοὺς, be wise）」と認め、そのような実践的な智恵（τὴν τοιαύτην φρόνησιν, that kind of insight）が最もすみやかに獲得される学業（διατρίβοντας, the studies）に励む人びとを「哲学者（φιλοσόφους, a philosopher）」とみなしている。

拙訳の「思わく（opinion, der bloßen Meinung）や意見（belief, des Dafürhaltens）」は、上記小池で「臆断」と訳されているδόξαに対応していると判断される。このδόξαは、上記＜注記と考察＞（7）の藤沢訳『メノーン』では「思わく」と訳されている。

なおδόξαには次のような意味がある。

①（主観的な）考え、思い、意見、見解、判断、信念；推測、想像、臆断

②表象、想念、仮象、幻影

③評価、評判；名声、名誉

(9) 此処の叙述は、『アンティドシス（財産交換）』274から275の始めまでの内容に対応している。≪原文注記≫129の＜注記と考察＞を参照のこと。

(10) a bridge of cloudsを、ドイツ語版のPhantomに照らして（ドイツ語版ではプラトーンの考えをdie Brücke：橋という語で説明している）、「幻影」と訳しておいた。

（11）≪原文注記≫130で指示されているように、『アンティドシス（財産交換）』275の内容が引かれている。

（11a）ここの文意に関しては、≪原文注記≫132の＜注記と考察＞（41）を参照されたい。

（12）πλεονεξίᾳは、教養・教育の論として（古代ギリシア以来今日まで）重要性をもっていると判断されるので、古川編著『ギリシア語辞典』で示されている意味をすべて記しておく。

①貪欲，強欲；私欲，欲望；利益，利得；増大；優位；傲慢.

②より大きな取分，より大きな分け前；過剰，過多.

なおπλέονには「より以上に」「より多く」「それ以上に」「さらに」「一層」などの意味がある。

（13）≪原文注記≫135の＜注記と考察＞（46）を参照のこと。

（14）イソクラテースの、この「紛れ込み」の没論理性は顕著である。イソクラテースのこの論理性の‘弛み’と、続く主情的なアテーナイの賞揚および自らの教養・教育論（弁論術・修辞学）との関係には、現代史の問題としても注意を向けておきたい。

（15）civilizationを「（精神的）文明」と訳しておいた。

（16）philologyはφιλολογίᾳ（議論好き、言論好き、学問好き）に由来し、φιλόλογος（話し好きな、議論好きな、学問好きな）から来ている。したがってイェーガーが述べている‘philology’は、「文献学」「言語学」ではなく、直後に置かれている the love of the logos, der Liebe zum Logos（言論好き）と同義である。イソクラテースは、φιλοσοφίᾳ：「知」を愛し求めること（愛知、哲学）ではなく、φιλολογίᾳ「言論」好き、議論好き、だったのである。イェーガーによるこの暗黙の対照（そのように判断されるのであるが）は、プラトーン・アカデーメイアとイソクラテースの対照の本質というべきものであろう。

10．イソクラテースと彼の精神的な仲間たちは、第二次アテーナイ海上同盟の崩壊以降、民主的なアテーナイにおける急進派・煽動政治家たちの責任を非難し、新しい汎ヘレニズムの理想に向かっていく。彼の弁論術の学校は公然と政治の研究大学（a political research - institute）になり、批判の精神のために、賞讃の演説（panegyric）の精神を捨てた

＜訳文＞152p ～ 155p

〖**イソクラテースは、『アレイオス・パゴス会演説』と『平和演説』において、海上同盟の崩壊以降のアテーナイを支配している煽動政治家たちに対抗し自らの教育理念を弁護していく。その教育の意識的な目的は、大衆がもっとも嫌った、古い世襲的な貴族を取り替えるための新しい知的エリート層の創造であった。しかし個人（the individual）と大衆（the mass）との、教養（culture）と無教養（its opposite）とのみぞは、今やあまりにかけ離れすぎて交わることができなくなっていた**〗（第二次アテーナイ：zweiten attischen）海上同盟の崩壊以降のあの年月において、教養（culture, der Bildung）のこういう種類の政治的な弁護をすることはかなり必要であったに違いない。イソクラテースと彼の精神的な仲間たちがアテーナイの惨事の責任があると非難していた、その煽動政治家たち（the demagogues, die Demagogen）は、明らかなことであるが、反撃した。民主的なアテーナイにおける急進派は、アテーナイ人が教養（culture, Bildung）と政治的な批判（political

criticism, politischer Kritik）とのつながりを徐々に理解するにつれて、いよいよ反教養的（anticultural, eine bildungsfeindliche Haltung）になっていった。実際、教養の主要な代表者たちは、真の教養（true paideia, der wahren Paideia）の性質（the character, das Wesen）について意見が割れていようとも、皆その当時のアテーナイ国家の精神的な敵対者であった。『アレイオス・パゴス会演説』と『平和演説』で詳しく説明された政治改革の構想を生み出したのは、その対抗の感じであった。そうして今やその対抗は、イソクラテースの自らの教育理念（his educational ideals, seine erzieherischen Ideale）の偉大な弁護において、公然と認められる。«143» 大衆がもっとも嫌った唯一のこと――古い世襲的な貴族（それは今ではもうその意義に対する価値を失ってしまっていた）を取り替えるための新しい知的エリート層（a new intellectual élite, einer neuen geistigen Aristokraie）の創造――は、イソクラテースの教育の意識的な目的（the conscious purpose of Isocrates' teaching, Isokrates bewußtes Erziehungsziel）であった。彼の弁護の頂点は、真の教養（true culture, wahre Bildung）は煽動政治家たちやおべっか者たちによって支配される社会では不可能だという主張である。«144» それでも、彼は、教養（culture）がアテーナイの精神に本来的に調和しないのではないということを証明したいと切望しており、そうして彼はもう一度早期の偉大なアテーナイ人たちの例に向かう。アテーナイを偉大にした政治家たち（the statesmen, die Staatslenker）は、アテーナイを現在支配している煽動政治家たちや扇動者たち（agitators, Agitatoren）とは異なる度量の人びとであった。高い教養（high culture, hoher Bildung）と優れた知性の人びとは専制君主を追い払い、民主制を打ち立て、夷敵を征服し、そしてギリシア人を自由にし彼らをアテーナイの指導の下に統合した。彼らは並みの人ではなかった。彼らはその周りの人びとより遥かに優れていた。そうしてイソクラテースの同市民たちへの最後の忠告は、そのような優れた人びとを尊敬すること、彼らを愛すること、そして彼らと親しくなろうとすること（cultivate, kultivieren）である。«145» それにもかかわらず、彼のことばすべてを静かに蔽っている深い悲観主義を見ないのはむつかしい。それら〔=彼のことば〕は、表面上はアテーナイの全市民の前で陪審員団に語られた；しかし実際にはそれら〔=彼のことば〕は、俗事や実際的な事柄から遠く離れた場所（an ivory-tower, der Zurückgezogenheit eines Winkels片隅の隠棲）から、それら〔=彼のことば〕を無益にするほどのはなはだ遠くから、現われた。個人（the individual, Individuum）と大衆（the mass, Masse）との、教養（culture, Bildung）と無教養（its opposite, Unbildung）とのみぞは、今やあまりにかけ離れすぎて交わることができなくなっていたのである。

〖イソクラテースと彼が代表している党派が、先祖伝来のギリシア人の都市国家（city-state, Stadtstaat）に対する自分たちの忠誠を捨てマケドニアーの王ピリッポスに期待をかけて新しい汎ヘレニズムの理想に向かっていたのは、アテーナイの前述のような状況があるからである。それでもイソクラテースは、アテーナイにとって最善の政体は何であるのか、を問いつづけている。彼の弁論術の学校は公然と政治の研究大学（a political research-institute）になり、批判の精神のために、賞讃の演説（panegyric）の精神を捨てた。彼が結論的に決めている理想は、強く貴族制的な要素をもつ民主制であり、この国家像はトゥーキュディデースから借用されたものだが、ペリパトス学派の政治家たちに影響を与え、さらに彼らをとおしてポリュビオスの歴史書、キケローの『国家論』の政治理念を形づくった〗われわれが、イソクラテースと彼が代表している党派がなぜ先祖伝来の

ギリシア人の都市国家（city-state, Stadtstaat）に対する自分たちの忠誠を捨て、新しい汎ヘレニズムの理想（ideal, Aufgaben使命）に向かっていたのかを理解できるのは、このことを念頭に置いてのみである。そうしてわれわれはまた〔=（このことを念頭に置いてのみ）〕、なぜギリシア人の最も教養ある人びと（the most cultured of the Greeks, der höchstgebildeten Schict）が‘偉大な拒否をした’[1] のかを、そして都市国家を救う（save the city-state, für die Freiheit des griechischen Stadtstaatsギリシア都市国家の自由のための）最後の戦いで自分たちの役目を果たすことができなかったのかを理解できる。マケドニアーの王ピリッポスという（新しい：neu）昇る星、それはポリスの防衛者たちにとって破滅の兆に見えたのであるが、その昇る星のなかに、イソクラテースは（反対にむしろ：vielmer）より幸福な未来の前兆を見た；そして彼の『ピリッポスに与う』の中で、彼は、自分の汎ヘレニズムの夢（dreamas, Idee）を実現するためにアテーナイの偉大な敵をテュケーによって選ばれた人物と呼んで迎えた。彼は、ピリッポスに、『民族祭典演説』でアテーナイとスパルターのために計画していた、その職務に取りかかるように、そうしてギリシア人を導いて夷敵に対抗させるようにしきりに促した。«146»マケドニアーに対する抵抗を組織した、デーモステネースのようなアテーナイ人たちについて、彼が語ったのはただ、彼らは国家（the city, der Polis）に何の利益ももたらすことはできない、ということにすぎなかった。[2] «147»この時までに、国家と教養（state and culture, Staat und Kultur）――それは（紀元前）5 世紀においては相互を補完し強化してきた――は、年ごとにどんどん離れ離れになっていった。そのころは、詩歌（poetry, Dichtung）と芸術（art, Kunst）が、政治的な共同社会の生活（the life of the political community, das Leben der politischen Gemeinschaft）を理想化していた（had transfigured, verklärt hatten）。今や哲学（philosophy, Philosophie）と教養（culture, Bildung）がそれ〔=政治的な共同社会の生活〕を厳しく批判し、そうしてそれら〔=哲学と教養〕は多くの政治的に不満を抱いている人びとによって支持されていたのである。イソクラテースの全著作の最後のものである『パンアテーナイア祭演説』は、未だ『アレイオス・パゴス会演説』で扱っているのとまったく同じ大きな（内政上の：innenpolitischen）問題にかかずらっている彼を見せる：アテーナイにとって最善の政体（constitution, Verfassung）は何であるのか？彼の弁論術の（rhetorical, die Rhetorik）学校において、雄弁術（oratory, der Redekunst）の内容――つまり、政治（politics, die Politik）――はますます強調されつつあった。«148» 明らかにプラトーンの影響はこのことといくらか関係があった；というのは、彼〔=プラトーン〕は空虚な形式主義は弁論術教育（rhetorical education, der rhetorischen Bildung）の最悪の欠点であるということを指摘していたのである。しかし、イソクラテースを（いっそう強く：immer stärker）その方向に引き寄せたのは、対外的な事態の強制やアテーナイの政治的状況に対する彼の態度でもあった。彼はいつも、弁論術（rhetoric, die Rhetorik）にとって何らかの（some, sachlichen具体的な）内容をもつことは必要だと認めていたのであり、だからもっと歩をすすめ内容を定めることは彼には難しいことではなかった。彼の弁論術の学校（gymnasium, Gymnasion）[3] は、まったく公然と、政治の研究大学（a political research-institute, eine Hochschule für Politik）になった。それ〔＝政治の研究大学〕は、批判の（of criticism, kritisch-erzieherischen）精神のために、賞讃の演説（panegyric, panegyrische）の精神を捨てた。（なるほど：zwar）賞讃の演説は、イソクラテースが97歳 [4] のときに執筆された、『パンアテーナイア祭演説』において、

最後によみがえった；しかし（but, aber）老人の別れを告げるアテーナイの賞讃（eulogy）には、«149» 彼の円熟期の高尚な希望に満ちた高揚（exaltation, Schwung）は少しもない。(5) その演説は、最高の種類の国制（constitution, Staatsform）――それは、イソクラテースによれば、政体（polity, der Verfassung）の（三つの：drei）主要な種類の適切な混合物である (6) ――に関する理論的な探究（theoretical disquisitions, historische Betrachtungen 歴史的な考察）に変化する。«150» 彼が結論的に決めている理想（the ideal, das Erstrebenswerte 追究するに値するもの）は、強く貴族制的な要素をもつ民主制であり、彼は、これがアテーナイの黄金時代､都市国家がまさにそのような政体（a constitution, diese Verfassung）をもっていたとき、にすでに試されていたものであると言明する。その点も、彼はトゥーキュディデース――彼はペリクレースに、葬送の辞で、アテーナイ国家をあらゆる種類の政体のすぐれた諸要素の理想的な（ideal, vorbildliche）結合だと言わせていた――から借用した。同じ理論がペリパトス学派の政治家たちに影響を与えた；そうして彼らをとおしてそれ〔=同じ理論〕は、ポリュビオスの歴史書 (7) ――とくに彼の古代ローマ帝国の国家精神（the spirit of the Roman state, des römischen Staatsgeistes）の叙述――、またキケロー (8) によってその小論『国家論*De republica*』において説明された政治理念（the political ideal, Staatsideal）、を形づくった。

＜注記と考察＞

(1)「‘偉大な拒否をした’」は ‘made the great refusal’（das vielberufene „Versagen“）の訳である。

(2) マケドニアー問題に対するデーモステネースとイソクラテースとの関係については、本継続研究（23）II の下記の項のイェーガーの叙述を参照のこと。

8．イソクラテースは（第二次アテーナイ海上同盟の破綻の前に）、寡頭制を非難し民主制を賞讃しつつも、その急進的な衆愚政治は改革する必要があると考え、アテーナイ国民にその「天性（the nature（φύσις）der Natur）」を明るみに出していくように呼びかけ、専制的な民衆煽動や大衆の物質主義を非難していく。このイソクラテースの考えを、（その後のマケドニアーのピリッポス（2世）との決定的な闘争のときに）デーモステネースが引き継ぐ。

9．イソクラテースはアテーナイ海軍帝国の夢についてその考えを『民族祭典演説』と『平和演説』とでは逆転させており、『アレイオス・パゴス会演説』ではまだその夢の維持を考えており前二者の間に立っている

10．イソクラテースは海上同盟解体後の『平和演説』において長く支持してきたアテーナイ海上覇権の理想を放棄する論を展開する。そこでは「支配権」の切望は僭主政治と本質的に同じでありその支配権に対する熱狂が市民を堕落させてきたと述べられ、その支配権追求を断念することとして民主制が定義されている

また、上記10．の＜注記と考察＞（13）（論文ページ139 ～ 141）も参照されたい。

なおデーモステネースについては､第Ⅲ巻「11 デーモステネース」で論じられている。

(3) γυμνάσιον は、①体育館、練習場、②体育学校、学校、③pl.体操、体育、という意味をもつ。（なお今日の「ジム」やドイツの「ギムナジウム」は、このギリシア語に由来している。）

（4）英訳版では98歳となっているが、ここではドイツ語版の方を生かした。

（5）イソクラテースの『アンティドシス』から『ピリッポスに与う』『パンアテーナイア祭演説』までについて、小池はその訳書の「解説」で次のように説明している。

イソクラテスは『アンティドシス』を公刊してのち、ほとんど一線から退いた格好で何も著作をしていない。と言っても驚くべきは、むしろ 7 年に及ぶ沈黙を破って著作活動が再開されたことである。『ピリッポスに与う』は、すでに90の齢に達した老人が多年の宿願をマケドニア王に託して著わしたものであり、いかにこのテーマが彼にとって重大であったかを示している。さらに驚くべきことに、94歳の年に『パンアテナイア祭演説』の執筆にとりかかり、病苦と老衰と闘いながら渾身の力を振りしぼって、過ぐる日のアテナイの栄光と父祖の徳を書き綴り、3 年後にこの大作を完成させた。そしてカイロネイアから運命的な報せが届くのは、その翌年の夏のことである。

（6）参考までに、『パンアテーナイア祭演説』には次のような論述がある。

132 わたしは、国制（τῶν πολιτειῶν, polity）の形態は、寡頭制（ὀλιγαρχίαν, oligarchy）、民主制（δημοκρατίαν, democracy）、君主制（μοναρχίαν, monarchy）の三つのみ*であると主張するものだが、これらの国制のもとで生活する人びとが、同胞市民のうちから最も有能で、最もすぐれた正しい仕方で政務にあたることのできる人物を選んで、統治やその他の業務に任用する慣例をつくるならば、彼らはどの国制のもとにあっても、内政外交とも立派な統治を実現するだろう。133 しかし彼ら市民が、無謀で劣悪な者をこれに登用するならば、このような者たちは国家全体の益を何ら考慮せず、私利私欲を充たすためにはいかなることをも甘受する輩であるので、国家は指導者の悪徳と相似た仕方で統治されることになるだろう。また、この国家において善悪いずれでもなく中間的な人びとは、意気壮んなときは甘言で誘う者を重用し、挫けたときは最も優秀な賢慮をそなえた者に救助を求めるので、そのときどきに不幸と繁栄が交替する。

*ここに次のような訳注が付されている。

プラトン『国家』544c以下、アリストテレス『政治学』第 3 巻第 6 章以下を参照。

（7）ポリュビオス：前200頃～前118頃。ローマ共和政期のギリシア人歴史家で、松原著には次のような説明がある（抜粋）。

彼の主著『歴史Historiai, ‘Ιστορίαι,（ラ）Historiae』全40巻は、ティーマイオスの後を承けて前264 ～前144年までを扱い、ローマの発展を基軸とした世界史（地中海諸国の歴史）を成している。その中でポリュビオスは、政治家および軍人としての視点から、ローマが世界の覇者となった過程とその原因を考究。叙述の正確さを尊び、ティーマイオスを「目よりも耳に頼った人」と非難している。政体循環史観と混合政体論で名高く、ローマは君主政・貴族政・民主政の融合せる卓越した国制（混合政体）のゆえに世界支配に成功したと説いた。またトゥーキュディデースに倣って歴史哲学を披瀝し、世界史全体の有機的統一性を強調。「実用的史学 pragmatiké historiā」の名称は彼の作品に由来する。現存するのは最初の 5 巻と残余の抜粋だけで、他は散佚した。

（8）キケロー、マールクス・トゥッリウス：前106年 1 月 3 日～前43年12月 7 日。共和制末

期の雄弁家、政治家、文学者で、松原著には次のような説明がある（抜粋）。

政治家としては無節操・無定見を非難されるものの、ローマ随一の偉大な雄弁家として、また哲学などギリシアの学術をラテン語に移しヨーロッパ近代諸言語の文語体形成に多大の影響を及ぼしたラテン散文の完成者として、古来高く評価されている。法廷弁論58篇をはじめ、900余通にのぼる書簡、『弁論家論De Oratore』（前55～前54）、『ブルートゥスBurutus』（前46）、『弁論家Orator ad M.Brutum』（前46）など一連の修辞学書、『国家論De Re Publica』（前54～前51）、『法律論De Legibus』（前51頃～前43頃、未完）、『トゥスクルム談論集Tusculanae Disputationes』（前45）、『アカデーミカAcademica』（前45）、『神々の本性についてDe Natura Deorum』（前45）、『宿命論De Fato』（前44）、『卜占論De Divinatione』（前44）、そして『老年論De Senectute』（前44）、『友情論De Amicitia』（前44）、『義務論De Officiis』（前44）に代表される哲学的著作など、大量の作品が現存する。

ギリシアのデーモステネースと並ぶ弁論術の双璧と称され、後世ヨーロッパにおける七自由学芸中の「修辞学」の寓意（アレゴリー）Allēgoria図像には、たいがい彼の姿ないし著書が描かれている。またキケローのような雄弁な、とかキケローばりの文章典雅なことを意味する形容詞（英）ciceronian,（仏）cicéronien,（独）ciceronianisch,……も派生した。後代の西ヨーロッパ文学に与えた影響は甚大であり、ダンテは『神曲』「地獄篇」の中で、彼を氏族名トゥッリオTullio（トゥッリウスのイタリア語形）と呼んで敬意を表している。ルネサンス期以降、西ヨーロッパでキケローの純粋なラテン語の文体に倣う「キケロー主義Ciceronianismus」が広まり、人文主義教育の基礎として讃仰されたのみならず、エラスムスやドレにはじまるキケロー論争をも生じせしめたことは文学史上に名高い。文学のみならず、政治思想や哲学・倫理思想、教育等々、多方面にわたってキケローが後世に及ぼした影響は測り知れず、わけても彼の造語たるフーマーニタースhumanitas（人間性・全人的教養）を通じてイタリア・ルネサンス以来の人文主義（フーマーニスムス）Humanismusの形成・確立に最も大きく寄与した古典作家であると言ってよいだろう。

（以上で第Ⅲ巻（第４編）の「6 イソクラテースは自らのパイデイアーを弁護する」の章は終了し、継続研究（29）で「7 クセノポーン」の章に入る）

≪原文注記≫

106.『アンティドシス（財産交換）』258.[(1)]

107.『アンティドシス（財産交換）』259.[(2)]

108. Blassの*Atische Beredsmkeit*Ⅱ64にある、アリストテレースの弁論術（rhetoric）の講義に関する言い伝えを参照のこと：主要なくだりはQuint.3.1.14とPhilodemus,*vol. rhet*.2.50（Sudhaus）．詩句の一行はエウリーピデースの*Philoctetes*, frg.796 Nacudkのパロディーである。アリストテレースの、弁論術（rhetoric, der Rhetorik）の教養との関連の公刊された最初の研究――失われた対話篇*Gryllus*（『グリュッロス』）ないし*On Rhetoric*、これはプラトーンの『ゴルギアース』にならって作られた――はその題名によって時期を定めることができる。それ〔=その題名〕は、クセノポーンの息子の名をとっ

て命名されたのであって、その彼〔=クセノポーンの息子〕のテーバイとの闘い（362）における英雄的な死は、大部分は彼の有名な父を‘喜ばせる（please）’ために書かれた〔**この挿入文は英訳版で加えられたものである**〕、実に多くの賛辞（εγκωμια）を引き起こした。アリストテレースの批評は、この注目すべき（remarkable, literarische 文学的な）現象で始まった。彼の現存する著作『弁論術』のもっとも古い部分は、彼がまだアカデーメイアで講義をしていたときに遡る。(3) F.Solmsenのこの主題の啓発的な取り扱いは*Die Entwicklung der aristotelischen Logik und Rhetorik*（*Neue Philol.Untersuchungen*, ed.W.Jaeger,vol.4, Berlin 1929）p.196f.を参照のこと。

109. その科学的な基礎とは弁証法であった。『パイドロス』において、プラトーンはもう一度弁論術が真の技術（techné, Techne）であるか否かを論じた――それは『ゴルギアース』ではきっぱりと否定して答えた疑問であった（この本〔=『パイデイアー』第Ⅲ巻〕の『パイドロス』の章を参照のこと）。彼は『パイドロス』で、それ〔=弁論術〕はディアレクティケー（dialectic, der Kialektik）という新しい基礎の上に提案されるべきであると主張した。Solmsen（注記108を参照）はアリストテレースの『弁論術』の、その初期の段階の発展を追い、それがプラトーンの態度における変化に完全に一致していることを見いだしている；しかし彼は、その発展過程において彼がプラトーンの『パイドロス』に帰する箇所を明示することはなかった。私は、『パイドロス』はアリストテレースの*Gryllus*よりも遅くに（362年以降のいつかに）執筆された可能性がもっとも高いと思う、がしかし私は前者〔=『パイドロス』〕をあまり遅くに置くことはできない。*Gryllus*においては、プラトーンの『ゴルギアース』におけるのと同様に、弁論術は技術（an art, einer Techne）では「ない（*not*）」。『パイドロス』において、プラトーンはそれ〔=弁論術〕はそれ〔=技術〕になる余地があると言っている。アリストテレースの弁論術の講義（rhetorical lectures, die Rhetorikvorlesung）のさまざまな段階は、これらの変化する見地を反映している。いずれにせよ、私は『パイドロス』を『アンティドシス』（353）よりも早期に置きたい。

110. Solmen（注記108）のp.207を参照。Blass（注記108）、p.452、は、ケーピーソドーロスのプラトーンのイデア論に対する攻撃（これはアリストレース批判の一冊の著作である！）の、一種の学問的な説明を提供している：彼は、ケーピーソドーロスは無知な人物そのものであったと言う。それゆえ、彼〔=Blass〕はその著作をイソクラテースの死後――アリストテレースのプラトーン学派からの離脱が全世界に知られたに違いない時期までを――のものと推定している、彼の古い師と彼の分離した学派の基礎に対する攻撃ゆえに。しかし明らかにアリストテレースは、ケーピーソドーロスが彼〔=アリストテレース〕を批判する自分の著作を著わし、そこでプラトーンのイデア論攻撃したときは、まだアカデーメイアの教師だったのであり、またプラトーンの忠実な門人であった。私の*Aristotle*, p.37f. を参照のこと。

111. p.184 を参照のこと。〔**この原文注記は英訳版で加えられたものである**〕(4)

112. イソクラテースは、『アンティドシス（財産交換）』258で、論争好きな哲学者の‘幾人か（some, einige）’が自分を侮辱している、と注意深く言っている：（つまり彼は）プラトーン（自身：selbst）とその弟子アリストテレースとの区別（をしている）。(5)

113.『アンティドシス（財産交換）』261.(6) イソクラテースは同じ態度を彼の最後の著作『パ

ンアテナイア祭』：その26．でもとっている。[7]

114. プラトーン自身は、『国家』第七巻で、自分のパイデイアーを数学とディアレクティケーとの結合と評している。

115.『アンティドシス（財産交換）』262. [8]

116.〖ソフィストたちを駁す』8. [9] で彼は同じ言葉を使っている：ἀδολεσχία καὶ μιχρολογία、ディアレクティケーの教育をプラトーンによって推奨されていると説明するために。

117.『アンティドシス（財産交換）』263 - 265. [10]

118.『アンティドシス（財産交換）』266. [11]

119.『アンティドシス（財産交換）』267〔**英訳版では266となっているがドイツ語版の267が正しい**〕[12] で、（たしかに：zwar）彼は、ディアレクティケーは学校（school, den Schulen（διδασκαλεῖα）で与えられる旧式の音楽教育（musical education, musische Bildung）よりも‘より雄々しい業務（more manly occupation, eine männlichere Form der Beschäftigung仕事の雄々しい形式）’であるとまさに言おうとしている、がしかし（but, aber）彼は一般に二つを合わせて分類する。彼の、横柄な読み書きの教育（literary education, die literarische Bildung）への言及は詩歌の注釈の先生たちをいらいらさせてしまったようである（『パンアテーナイア祭演説』18）。[13] 彼が、パイデイアーと詩歌との関係に関する特別の著作を執筆するという彼の約束（『パンアテーナイア祭演説』25）[14] をどうにかして果すことをしなかったのは残念なことである。（その際はおそらく：dabei whol）彼はプラトーンの『国家』を実例（an example, Beispiel）と――たぶん範例（a model, Vorbild）と――したことであろう。

120.『アンティドシス（財産交換）』268. [15] カルリクレースも、プラトーンの『ゴルギアース』484c-d [16] で、ソークラテース学徒たちのディアレクティケーの教育（training, Bildung）は、余りにも長く続行されるとすれば、その大家たちを、商取引や公務で必要な国法やものを言う力について無知にする、と非難する。それは彼らを人間同士（their fellow-men, Menschenkenntnis世態人情の知識）の点で‘世間知らず’にする。イソクラテースはここ〔=（『アンティドシス』の該当箇所）〕で、あの批評（that criticism, diese Kritik）のことを思い描いている。プラトーンは、自分はそれを『ゴルギアース』で完全に論駁したものと思った、がしかし今やイソクラテースがそれを再び復活させる――これらの二種類の教養の対立（the opposition between these two types of culture, diser Gegensatz der Bildungsideale）は永遠であるという証拠である。イソクラテース『パンアテーナイア祭演説』27, 28 [17]〔ドイツ語版では28のみが指示されている〕も参照のこと。

121.『アンティドシス（財産交換）』268-269. [18] イソクラテースは、（すでに：schon）『ヘレネー頌』2 - 3 [19] で、ソークラテース以前の哲学者たちであるプロータゴラース、ゴルギアース、ゼーノーン、そしてメリッソスを（ただの：bloße）パラドックス・ハンターであると酷評し、自分の読者たちに彼らを真似しないようにと警告していた。彼は、『アンティドシス（財産交換）』では、エンペドクレース、イオーン、アルクマイオーン、パルメニデース、メリッソス、そしてゴルギアースの名を挙げる。〔**以下は英訳版で加えられたものである**〕もちろん彼はゴルギアースを、雄弁家としてではなく、有名な主張、‘存在するものは何もない（Being is not）’――これは、エレアー学派の哲学者たちにとって非常に懐かしい、パラドックスのふざけた誇張であった――の案出者として批判して

いる。

122. プラトーンは、『パルメニデース』と『テアイテートス』において、エレアー学派[20]の哲学者たちや、ヘーラクレイトス、[21]プロータゴラースによって提起された諸問題を論議することに大いなる興味を示した。アリストテレースが示している著作の目録は、クセノパネース、[22]ゼーノーン、[23]メリッソス、[24]アルクマイオーン、[25]ゴルギアース、[26]そしてピュータゴラース学派の人々に関する、（今は失われた）特別な諸著作物を教える。これらの研究はすべて、古い哲学者たちについてのアカデーメイアの徹底的な研究から生じたのであり、またそれらの成果はアリストテレースの『形而上学』の最も初期の部分に――とくに哲学史を扱っている第1巻に――見ることができる。同様に、クセノクラテース[27]はパルメニデース[28]とピュータゴラース学派の人びとについて、**スペウシッポスはピュータゴラース学派の人びとについて〔ゴチの箇所は英訳で追加されたもの〕**、そしてヘーラクリーデース・ポンティクス[29]はピュータゴラース学派の人びとについて、デーモクリトス[30]について、そしてヘーラクレイトスについて執筆した。そういうわけで、イソクラテースのこれら古い哲学者たちに対する論戦は、彼のプラトーンのパイデイアーを全般的に批判することの一部分だと合理的に見なされ得る。それが〔=プラトーンのパイデイアーが〕ソークラテース以前の哲学者たちへの関心をよみがえらせていること（its renewal, diese Renaissance）は、彼をいらだたせている特徴のもう一つのものであった（『アンティドシス（財産交換）』285[31]を参照）。この研究（this work）〔=プラトーンのパイデイアーがソークラテース以前の哲学者たちへの関心をよみがえらせていること〕のもっと後の展開――アリストテレースの老年の弟子たちによって生み出された優れた（great, gewaltigen強力な）哲学の歴史書――に対して、彼は何と言ったことだろう？

123.『アンティドシス（財産交換）』270f.[32]

124.『アンティドシス（財産交換）』271.[33]

125.『アンティドシス（財産交換）』271に在る‘*such* phronésis’（ή τοιαύτη φρόνησις）（「そのような」知恵）という言葉遣いの中の強調に留意すること。それは、プラトーンの理論的な（theoretical, theoretischen）phronésis（プロネーシス）に対抗して、イソクラテースによって推奨される実践的な政治の知識（the knowledge of practical politics, praktisch-politische Werterkenntnis実際に役に立つ政治の価値知識）を置いている。プラトーンの哲学の中での、プロネーシスの、存在の形而上学の知識（metaphysical knowledge of Being, metaphysischen Seinserkenntnis）への変化については、私の『アリストテレース』p.83f.〔**ドイツ語版ではS.85ff.となっている**〕を参照のこと。

126.『アンティドシス（財産交換）』233-234では、ソローンやクレイステネースだけではなく、アテーナイ民主主義の古典時代の偉大な政治家たち――テミストクレースやペリクレース――も、政治的な、また雄弁術的な徳（arête, Arete-Ideals）の模範と評されている。プラトーンは後者の二人を『ゴルギアース』と『メノーン』で痛烈に非難しているのである。そういうわけで明らかにイソクラテースは、まさに彼〔=イソクラテース〕が別の時にカルリクレースに味方していたように、プラトーンによって攻撃される政治家たちの味方をしている、（原文注記120を参照）。

127.『アンティドシス（財産交換）』274.[34]

128. ‘Philologia（議論好き）’：『アンティドシス（財産交換）』296. [35]

129.『アンティドシス（財産交換）』274-275 [36]：弁証法論者によって探し求められる、‘そのような技術’は‘かつて存在しなかったし今も存在しない。しかしそのようなパイデイアー［ἡ τοιαύτη παιδεία］が発見されるまで、人びとはそれを他者に約束するのを止めるべきである。’このὑπόσχεσιςは、教師の、自分の弟子を教えるという誓約である（**『パイデイア』Ⅱ，111を参照のこと**）――ἐπάγγελμα、**教授の‘profession’〔ゴチの箇所は英訳版で加えられたものである**〕、と同じことである。[37]

130.『アンティドシス（財産交換）』275. [38] ここではイソクラテースは意図的にプラトーンのErosの概念を使っている。彼は、それ〔=Eros〕はプラトーンがそれにあてがう些末な弁証法的方法よりもよりよい対象に値するだろう、ということをほのめかしている。

131. このことはすでに『ソフィストたちを駁す』21 [39] で、また『ニーコクレース』7 [40] ではより積極的に述べられていた。

132.『アンティドシス（財産交換）』276 ～ 277. [41]

133.『アンティドシス（財産交換）』278. [42]

134. プラトーン『ゴルギアース』508a [43] を参照のこと。そこでは雄弁家カルリクレースはプロネクシアー、権勢慾、の真の典型である。

135. イソクラテースが、弁論術（rhetoric, Rhetorik）は単に人を利己的な衝動（egoistic impulses, egoistischen natürlichen Triebe 利己的で本能的な衝動）を満足させるように教育しているというプラトーンの非難、に答えているということを証明するのは容易い。『アンティドシス（財産交換）』275 [44] で、彼は哲学の学生たちに自分たちの‘eros’[45] を雄弁術（the art of oratory, der Redekunst）に向けるように、また‘正しいプレオネクシアー（より大きな分け前）’に全面的に没頭するように忠告していた：彼は、自分がこれらの興味深い（interesting, aufreizende挑発的な）見解を追って説明するだろうと言い添えている。それらは『アンティドシス（財産交換）』281以下 [46] まで説明されていない。そこ〔=281以下〕で彼はプレオネクシアー、（勢力、富、重要さなどの）増大（aggrandizement *, des Mehrhabenwollens）、の本質の特別な分析を行ない、それ〔=プレオネクシアー〕に肯定的な意味を与えることを試みている。それ〔=プレオネクシアー〕は、根深い人間の本能である、所有したいという衝動である。この点で彼〔=イソクラテース〕は、カルリクレースと自分自身との間に、**彼は以前は彼〔=カルリクレース〕を弁護していたのであるが、**[47]〔**ゴチの文は英訳版で加えられたものである**〕鋭い境界線を引いている。その境界線とは倫理性という国境である。

＊英訳版ではaggrandisementとなっている。

136.『平和演説』33。[48] その演説の31 [49] では、彼がカルリクレースの超道徳的な考え（the non-moral ideal, den Amoralismus無道徳主義）、そして、‘力は正義である’という彼〔=カルリクレース〕の説、それをプラトーンは彼の『ゴルギアース』で弁論術およびそれ〔=弁論術〕の実際に役に立つ政治を教えるという目的と結びつけて考えていたのであるが、に反対していることは明らかである。イソクラテースは『アンティドシス（財産交換）』でそれらを非常に明瞭に鋭く識別しようとしている。

137.『アンティドシス（財産交換）』282と285. [50] 283 [51] では、イソクラテースは哲学者たちを彼らの言葉の悪用ということで非難している：彼らは名称をもっとも高貴な

ものから最も卑劣なことがらへと移し変えている。実際には彼自身が、*pleonexia*（「プレオネクシアー」）をきわめてさもしい特質から理想的なものへと移し変えた。このことでは彼は明らかにプラトーン、『饗宴』206a、(52) を模範としているのであって、彼〔=プラトーン〕は理想化されたEros（エロース）を最高に美しい、最高に善いものをもちたいという衝動として定義している（『パイデアイアー』Ⅱ，189、アリストテレースの自己愛（self-love）の類似した再解釈への私の言及が付いている、(53) を参照のこと）。〔**手前の（　）の箇所は英訳版で加えられたものである**〕同様に、プラトーンは『ゴルギアース』で、エゴイスティックな権力政治家たち（pewer-politicians, Machtmenschen）が獲得しようとする権力（the power, die Macht）は真の権力ではないと断言していた。イソクラテースは、「自分の*his*」弁論術はあの真の高貴な、自己を豊かにすること（that true and noble self-enrichment, dieser wahren höheren Selbstbereicherung）をもたらす、ということを証明するために同一の方法を用いる。彼は結局、嫌悪される（despised, viel geschmähten大いに誹謗される）弁証法という科学からある真理を学んでいたのだ！

138.『アンティドシス（財産交換）』286-290. (54) 彼の、自制と自己自身の魂の世話という究極的な理想（ideal, dem Ideal）に通じる（304 (55) を参照のこと）、自分自身のまじめな弟子たちの叙述は、まったくソークラテース的調子である。イソクラテースは、ソークラテースの実践的な徳性（practical morality, die practische Moral）を借用し（プラトーンの弁証法や存在論抜きで）、それに自分自身の弁論術的、政治的教養（his own rhetorical and political culture, seiner rhetorisch-politischen Bildung）を混ぜる。

139.『アンティドシス（財産交換）』47-50. (56)

140.『アンティドシス（財産交換）』296. (57)

141.『アンティドシス（財産交換）』295-297, 293f. Cf.302：‘身体の競技ではアテーナイ人は多くの競争相手があるが、しかし教養（culture[=paideia]）においては全世界が彼ら〔=アテーナイ人〕の優位性を認めている’ (58)

142.『アンティドシス（財産交換）』297-298 (59)

143. それは『アンティドシス（財産交換）』の結論部（291-319）(60) をとおして現われている。

144.『アンティドシス（財産交換）』299-301 (61) によれば、政治改革者と煽動政治家は、アテーナイというすばらしい名の大きな汚点である；アテーナイはその偉大さをその教養（culture, Kultur）（paideia）のみに負っている。その節は、教養（culture, Kultur）とその当時の政治生活（contemporary political life, dem politischen Leben）との間の鋭い区分のゆえに興味深い。彼〔=イソクラテース〕が、アテーナイを尊敬されるように、世界中で愛されるようにしたその教養、その〔=その教養の〕指導者たちのことを話すとき、彼は第一級の人たちのなかで自分自身のことを考えている。そうして疑いもなく、彼はまったく正しい。

145. 彼〔=イソクラテース〕は、『アンティドシス（財産交換）』306-308 (62) で、過去のすべての偉大なアテーナイの政治家たちを彼らの教養と教育で見積もる。彼はその知的上流階級（its intellectual aristocracy, der Geistesadel精神的高貴さ）のみがアテーナイを偉大にしたと結論を下している。

146.『ピリッポスに与う』8-9. (63)

147. イソクラテース「書簡集」2.15.[64] 彼は、ここでは、デーモステネースのことをほのめかしているのに違いない；その手紙の時期に、「彼」（*he*, er）がピリッポスに対する抵抗の真の指導者（the real leader, die Seele中心人物）だった。

148. 彼〔＝イソクラテース〕の増大する文体（style, der stilistischen Form）の軽視については『パンアテーナイア祭演説』2-4.[65] を参照のこと。

149. それは、彼が『パンアテーナイア祭演説』のお終い（270）[66] で述べている年齢である；序論（3）[67] において、**彼は自分が94歳であると言っている。彼の演説に関する著作は長い病気によって遮られた。〔ゴチの文は英訳版で加えられたものである〕**

150. それ〔=その演説（『パンアテーナイア祭演説』）〕はやはり、真のパイデイアー（true paideia, die wahre Paideia）についてのある見解を含んでいる：（特に：insbesondere）興味深い節、30-33、[68] を心に留めよ、それは一ページにわたる（包括的な：umfassend）パイデイアー（paideia, der Paideia）の定義である。彼がアテーナイのパイデイアーの賞讃で述べていることのすべてが、彼の祖先の賞讃に織り混ぜられている。彼がアテーナイで恋しているものは、その過去（の歴史：der Geschichte）である。

＜注記と考察＞

(1)『アンティドシス（財産交換）』258は下記のとおりである（小池訳）。

> **258** そしてまた、なにぶん論争技術に熱中する一派（τὰς ἔριδας σπουδαζόντων, the professors of disputation）にも世の最も低劣な者と同様に、公共に関わる有用な言論（τῶν λόγων, the art of speaking）を冒瀆する者がいる（ἔνιοί, there are some）のをみれば、リュシマコスのことを驚き訝しむにはあたるまい。彼らは言葉の力に無知であり、また言論こそがこれを用いる人をすみやかに益することも知らず、実践的言論を中傷すれば、自分たちの営為の名誉が増すと夢想している。

なお上記訳文中の「彼らは言葉の力に無知であり、また言論こそがこれを用いる人をすみやかに益することも知らず」は誤訳であろう（正しくは、小池訳に準じれば、「彼らは言葉の力に無知というわけではなく、また言論こそがこれを用いる人をすみやかに益することも知らないわけでもなく」であろう：イェーガーもこのように読んでいる）。

(2)『アンティドシス（財産交換）』259は下記のとおりである。

> **259** 論争家たちについては、彼らがわれわれにする以上にもっと辛辣な批判をすることはできよう。しかしながら、思うに、嫉妬（τοὺ φθόνου, envy）のために精神に破綻をきたした人の低みに身を落とすことはもとより、自分の門弟を害しているわけではなく、ただ益する力のさらにない人びとを罵倒することも避けるべきであろう。それでもしかし、彼らについては簡単には触れておきたい。

(3) アリストテレースの『弁論術』の執筆経緯については、岩波書店『アリストテレス全集18』（2017）の訳者堀尾耕一は、その「『弁論術』解説」の「三、『弁論術』の構想」で下記のように説明している（著書ページ594）。

> アリストテレスが、実際にいつの段階で、またどのような動機で本書を執筆したのかという点について、確かなことはわかっていない。ただ、彼の弁論術への関心は、プラトン存命中のアカデメイアにおいてすでに温められていたと考えられ、前350年代にはその成果が『弁論術集成』等にまとめられたと見る研究者も多い。同時代

に若者たちを集めて弁論の学校を開設し、評判をあげていたイソクラテスへの対抗心がその動機であったという逸話も伝わるが、真相は不明である。*

*ここに次のような注記が付されている。

アカデメイアとイソクラテスとの対抗関係、およびアリストテレスの立ち位置については、廣川とくに第七章を参照。

（4）第Ⅲ巻のp.184は、第8章「プラトーンの『パイドロス』：哲学と弁論術」である。

（5）上記（1）の「公共に関わる有用な言論（τῶν λόγων, the art of speaking）を冒瀆する者がいる（ἔνιοί, there are some）のをみれば」の箇所のことだろう。

（6）『アンティドシス（財産交換）』261は下記のとおりである。

261 論争的言論（τοῖς ἐριστικοῖς λόγοις, disputation）に長けた人びとも、また天文学や幾何学やその他の学問研究に集中している人びとも害毒を流しているわけではなく、その弟子を益するものだと私は考えている。ただし、彼らが約束しているほど大きな益ではなく、また門外漢に思われているほど小さな益でもない。

（7）『パンアテナイア祭』26は下記のとおりである。

26 さてわたしは、祖先から受け継いだ教育（παιδείας, the education）を蔑ろにするものではないが、またわれわれの時代に確立した教育についても賞讃をおしまない。それは幾何学、天文学、また「論争的」と呼ばれる問答法（τοὺς διαλόγους τοὺς ἐριστικοὺς καλουμένους, the so-called eristic dialogues）のことであり、この最後に挙げたものは若年の者が度外れに愛好するものであるが、年長者でこれを我慢できると言う人は一人もいない。

（8）『アンティドシス（財産交換）』262は下記のとおりである。

262 すなわち、世のたいていの人（πλεῖστοι τῶν ἀνθρώπων, most men）はその種の学びを駄弁（ἀδολεσχίαν, empty talk）や些末論議（μικρολογίαν, hair-splitting）とみなしている。それらのどれも、私的な問題に関しても公共の事柄に関しても、まったく役に立（χρήσιμον, useful application）たず、学んでみても憶えた先から忘れてしまうが、あまりに浮世離れしていて、実際の用（ταῖς πράξεσιν, what we do）の助けになるものでなく完全に日常の必要（τῶν ἀναγκαιων, our necessities）の外にあるからだ、と。

（9）『ソフィストたちを駁す』8 は下記のとおりである（原文注記で引かれているギリシア文をゴチにしておく）。

8 現在に関しては必要なことを何ひとつ言うことも忠告することもできない、むしろ常識的判断をとる人（τοὺς ταῖς δόξαις χρωμένους, those who follow their judgements）のほうが、知識をもっている（τὴν ἐπιστήμην ἔχειν, have exact knowledge）と公言している人よりも一貫性があり的確な判断を下すのではないか。ここに至って、思うにおそらく当然のことであるが、一般の人びとはくだんのごとき談論が魂を配慮する（τῆς ψυχῆς ἐπιμέλειαν, a true discipline of the soul）こととは認めず、無駄話や細かい穿鑿（ἀδολεσχίαν καὶ μιχρολογίαν, stuff and nonsense）とみなして軽蔑するだろう。

（10）指示されているのは『アンティドシス（財産交換）』263 ～ 265と長いが、教養思想を考察する上で現代性をもっているので、略さずに引いておく。

263 それらの学問についての私の判断は、これとまったく同じではないが、しかし

さして遠くもない。その学問教養（τὴν παιδείαν, this training）が実際の行為には何ら役立つものでないと（μηδὲν χρησίμην, of no use）する人びと意見は正しいと思われるし、他方でまたその学問を賞讃する人びとも真実を語っていると思うのである。それゆえ、私の論は首尾一貫しないことになるが、それはその学問が、われわれの教えているものと本性をまったく異にするからである。**264** 他の学問はわれわれがそれの知識（τὴν ἐπιστήμην, a knowledge）を修得すれば、その知識がわれわれを益するものであるのに対して、先の学問は、厳密な論理を研究しても、その結果として（それで生計を立てることを選んだ人以外には）何の恩恵があるわけでもない。ただしかし、学習者には裨益するところがあるのだ。**265** なぜなら、天文学や幾何学などの細かい厳密な（τὴν περιττολογίαν καὶ τὴν ἀκρίβειαν, the subtlety and exactness）理論に没頭すると、事柄がきわめて理解の難しいものなので、強いて精神を集中することになる。また、語られ示される内容に粘り強く密着し、思考をふらふらさせない習慣がつく（συνεθιζόμενοι, being habituated）。こういった学問で鍛えられ頭脳が鋭くなれば（ἐν τούτοις γυμνασθέντες καὶ παροξυνθέντες, after being exercised and sharpened on these disciplines）、別のもっと真剣な、価値の高い事柄も楽々と受け入れ学ぶことができるようになる。

(11)『アンティドシス（財産交換）』266は下記のとおりである。

266 結論として、現場に根ざして（ἐν τῷ παρόντι, in the present）おらず、言行いずれにおいても何の益（ὠφελοῦσαν, help）ももたらさないものを「哲学（φιλοσοφίαν, “philosophy”」と呼ぶべきではないと私は思う。むしろ、そのような学業は魂（τῆς ψυχῆς, the mind）の鍛錬（γυμνασίαν, a gymnastic）であり哲学の準備と呼びたい。子供が学校で学ぶものと比べて大人向けではあるが、ほとんど選ぶところはない。

(12)『アンティドシス（財産交換）』267は下記ととおりである。

267 というのは、子供（οἱ παῖδες, boys）もまた、読み書き（τὴν γραμματικὴν, grammar）や音楽文芸（τὴν μουσικὴν, music）やその他の教育（τὴν ἄλλην παίδειαν, the other branches）について刻苦して学ぶことによって、よりすぐれた言論や思慮判断という点では何らの進歩もしないけれども、もっと重大深刻な学問に対して従前よりも学びが容易になるからである。

(13)『パンアテーナイア祭演説』18は下記のとおりである。

18 わたしの友人がやって来て、こう言ったのである。リュケイオンで、あらゆることを知っていると吹聴し、どこにでも顔を出す群小ソフィストが三、四人腰を据えて、詩人たち、とくにヘシオドスとホメロスの詩について議論を始めた。彼ら自身の言葉で語ることはなく、ただ詩人たちの詩を吟唱し、またその他先人の語った言葉のうちで洒落た感想を記憶から呼び出していただけであったが。

(14)『パンアテーナイア祭演説』25は下記のとおりである。

25 これらすべての事情に鑑みて最上の方策は、わたしを誹謗しようとした最近の試みについて所感を述べ、引き続いて当初から温めていた見解を表明することであろう。なぜなら、思うに、もし著作において教育（τῆς παιδείας, education）と詩（τῶν ποιητῶν, the poets）についての考えを表明しておけば、彼らが偽りの責めを捏

造して勝手な放言をすることもやむであろうから。

（15）『アンティドシス（財産交換）』268は下記のとおりである。

268 というわけで、私は一定期間ならば先の厳密学問※（τὰς παιδείας, these disciplines）に没頭することを若い人びとに推奨するが、彼らは持ち前の素質（τὴν φύσιν, their minds）がこれによって枯渇しないように、また古いソフィストたちの論議に落ち込まないように注意しなければならない。すなわち、彼らのある者は存在するものの数が無限だと言い、エンペドクレスはそれは四つであり、またそれらのうちに反撥憎悪と親和友愛との力が含まれていると言い、イオンは三つより多くないと、アルクメオンは二つだけと、パルメニデスとメリッソスは一つのみと、ゴルギアスは完全に無であると言う。

*「厳密学問」は文脈上の訳語と判断される。

（16）『ゴルギアース』484 c-d はカルリクレースの発言で、下記のとおりである（加来訳、岩波文庫）。なお485に関しては本継続研究（21）Ⅱ．7．の＜注記と考察＞（5）（論文ページ300 ～ 301）を参照されたい。

かくて、事の真相は以上述べたとおりなのであるが、これはあなたにもわかってもらえるであろう、あなたが哲学（φιλοσοφίαν, philosophy）はもういい加減にやめにして、それよりももっと重要な仕事へ向かうならばだね。というのは、いいかね、ソクラテス、哲学というものは、たしかに、結構なものだよ、人が若い年頃に、ほどよくそれに触れておくぶんにはね。しかし、必要以上にそれにかかずらっていると、人間を破滅させてしまうことになるのだ。なぜなら、せっかくよい素質をもって生れて来ていても、その年頃をすぎてもまだ哲学をつづけていたのでは、立派なすぐれた人間となって、名声をうたわれる者となるのに、ぜひ心得ておかなければならないことがらを、どれもみな心得ないでしまうにきまっているからだ。すなわち、そのような人間は、国家社会に行なわれている法律や規則にもうとい者となるし、また、公私いろいろの取りきめにおいて、人びとと交渉するのに用いなければならない口上も知らず、さらに、人間がもついろいろな快楽や欲望にも無経験な者となるからである。つまり、一口でいえば、人さまざまのあり方について、まるっきり心得のない者になるからなのだ。だから、そんな状態で、公私いずれにもせよ、何らかの行動に出るようなことがあれば、物笑いの種になるだけであろう。･･･

（17）『パンアテーナイア祭演説』27, 28は下記のとおりである。

27 しかしわたしは、これに邁進する者に対して、以上の学問すべてに刻苦精励することを勧めたい。その真意は、かりにそれらの学問が他に何の善ももたらさずとも、少なくとも若者をさまざまな過誤から遠ざけてくれるからである。畢竟、これらより以上に年少の者にとって有益かつ適正な学業はないことをわたしは認めるものであるが、**28** しかし長じて成人男子の資格を認定された後は、もはやこれらの習練（τὰς μελέτας, disciplines）は似つかわしくないと言わざるをえない。なぜなら、わたしの見るところ、これらの学業を究めて他に教えるまでに至った人びとの中には、その体得した知識を適切な機会に応じて活用することができず、生活上の他の営みにおいては弟子よりも思慮の点で劣る者がいる。

（18）『アンティドシス（財産交換）』の268-269が指示されているが、268は上記（15）の

とおりであり、269のみを以下に引いておく。

269 私の考えるに、これらの奇説は人形芝居によく似ていて、何の益をもたらすものでもなく、ただ愚かな者たちを引き寄せるにすぎない。一廉のことをなそうと望む者は、むなしい論議（τῶν λόγων τοὺς ματαίους, all vain speculations）や、われわれの生を何ら益さない行為は、真剣な追究（τῶν διατριβῶν, their interests）から排除すべきである。

(19)『ヘレネー頌』2 - 3は下記のとおりである。

2 私としても、このようなたわごとの類いが最近生まれた現象であって彼らはただ発想の新奇を追うものであると見ていたならば、これほどに彼らに驚きはしなかっただろう。しかし実のところは、いかに物忘れがひどくとも、プロタゴラスや彼と同時代のソフィストがそれとよく似た、またそれよりもさらに困惑させられる書き物を残していることを知らない人はいない。

3 たとえば、臆面もなく「存在するものは何もない」と論じたゴルギアス、「同じことが可能でありまた不可能である」と証明を試みたゼノン、自然に生じた事物は無数にあるのに「万物は一つである」という論証を発見しようとしたメリッソス、誰がこの点で彼らの上を行くことができようか。

(20) エレアーはイタリア南部ルーカーニアのギリシア系都市で、松原著には次のような説明がある（抜粋）。

「アカイメネース朝ペルシア帝国の小アジア征服（前545）後、ペルシアに隷属することを嫌って祖国を脱出したポーカイア市民により、前540年頃に建設された。この植民市建設には哲学者クセノパーネスも参与したと伝えられ、彼の弟子パルメニデースはエレアー学派Eleatikon ethnos, Ἐλεατικὸν ἔθνος,（英）Eleatic Schoolと呼ばれるギリシア哲学の一派を確立。厳密な論理主義と合理主義的な批判精神を特徴とする同学派は同じくエレアー出身のゼーノーンやサモスのメリッソスらに継承されていった。」

(21) ヘーラクレイトス：前540頃～前480頃。ギリシアのイオーニアー学派の哲学者で、松原著に次のような説明がある（抜粋）。

「エペソスの王家（同市の創建者アンドロクロスの末裔）の出身。「王家」の家督を弟に譲り、独学で――一説にクセノパネースに師事して――非情な学殖を積み、ヘーラクレイトス派hoi Hērakleiteioi, οἱ Ἡρακλείτειοιなる哲学の一派を創始。」「彼は宇宙の始源（アルケー）arkheを「火」と見なし、万物は相反するものの闘争と統一に従って生成するが、絶え間なく変化する事象も、世界を支配するロゴスlogos（理法）により全体として調和が保たれていると主張、真の智はこのロゴスを知り、それに従った生活を送ることにあると説いた。「万物は流転（パンタ・レイ）す Panta rhei, παντα ρει」「同じ河に 2 度入ることはできない」「太陽は日ごとに新しい」等々、神託に似た箴言風の言葉で知られる。『自然について（ペリ・ピュセオース）Peri Physeos』なる初期ギリシア散文体の著作があったが、散逸して短い引用断片130余篇が残存するのみである。」「ヘーラクレイトスの思想は、プラトーンの哲学やストアー学派、さらにキリスト教徒にまで影響を及ぼしている。」

(22) クセノパネース：前570頃～前475頃。ギリシアの詩人・哲学者で、松原著には次の

ような説明がある（部分抜粋）。なおクセノパネースについては本継続研究（19）≪原文注記≫の＜注記と考察＞（27）（論文ページ30）でも松原著より引いている。

「パルメニデースの師であったことからエレアー学派の祖とされるが、体系的哲学者というよりも、伝統的な考え方を鋭く批判した哲学的叙事詩人といえよう。」「思惟によって宇宙を支配する唯一万能・不変不滅の非人格的な神の存在を説いた。」

（23）ゼーノーン：前490頃～前430頃。エレアー派の哲学者で、松原著では次のように説明されている。なおゼーノーンについては本継続研究（14）Ⅱ.11.の＜注記と考察＞（8）（論文ページ158）でも松原著より同箇所を引いている。

ゼーノーンは師パルメニデースの一元論を支持し、その説に反対する者を矛盾に陥らせる一種の帰謬法を用いて相手を論破。「アキッレウスは亀に追いつけない」（…中略…）や「飛ぶ矢は静止している」（…中略…）などの、いわゆるゼーノーンの論法 paradoksos, παράδοξος を展開したことで知られる。このため彼はアリストテレースによって「弁証法（問答法）dialektike, διαλεκτική」（ディアレクティケー）の創始者とされた。40歳近くの頃、師とともにアテーナイを訪れ、講義を開いてペリクレースや若きソークラテースに感銘を与え、後者の問答法やソフィストの論争術に影響するところ甚だ大であった。

（24）メリッソス：前490頃～前430頃。エレアー派の哲学者で、松原著では次のように説明されている（抜萃）。なおメリッソスについては本継続研究（14）Ⅱ.11.の＜注記と考察＞（9）（論文ページ158）でも松原著より同箇所を引いている。

他の哲学諸派に対して師の教説を擁護し、エンペドクレースの多元論やアナクシメネースの濃化稀化の概念を批判。実体（宇宙）は不変・不動なものであるとしたが、パルメニデースとは異なり、「それは空間的に無限な存在である」と主張した。

（25）アルクマイオーン：前500頃活躍。クロトーンの医師、科学者で、松原著では次のように説明されている。

ピュータゴラースの弟子。自然科学に関する書物を著わし、ピュータゴラースの思想を人体に適用して、肉体は相反する諸要素の調和により健康を保ち、その調和が破れると疾病を生ずると説いた。動物解剖を通じて人体構造の研究に役立て、またギリシア人として初めて眼の手術を行ない、脳は感覚器官と通じており、知覚や思考を司る中枢であるとした。ヒッポクラテースと並んでギリシア医学の父と称される。

（26）ゴルギアース：前485頃～前380頃。ギリシアのソフィスト、弁論術の大家。本継続研究（6）Ⅱ.3（→9）の＜注記と考察＞（2）（論文ページ268）を参照のこと。

（27）クセノクラテース：前396頃～前314。ギリシアの哲学者で、松原著では次のように説明されている（抜粋）。

若い頃からアテーナイでプラトーンに学んだが、生来愚鈍だったため、プラトーンから「アリストテレースには手綱が必要だが、クセノクラテースには拍車が必要だ」と評された。しかし勤勉かつ実直な人柄で、師のシケリアー（現・シチリア）旅行にも随行し、僭主ディオニューシオスがプラトーンに向かって、「首を刎ねるぞ」と脅した時には、傍らにいた彼が「私の首を先に斬ってからにして下さい」と割って入ったという。プラトーンの死（前347）後、しばらくアリストテレースとともにアッソスで過ごしてからアテーナイへ戻り、スペウシッポスの後を継いでアカデーメイアの学頭となる（前339～前314）。･･･（中略）･･･クセノクラテースの

多数の著述はすべて失われたが、ピュータゴラース学派の影響を受けながらも、プラトーン晩年の思想を体系化し、知と徳、徳と幸福の一致を唱えたとされている。彼の教説は、アリストテレースやテオプラストスによって論ぜられ、またパナイティオスやキケローからも高く評価された。

(28) パルメニデースは、上記訳文 8．の<注記と考察＞（5）のとおり。

(29) ヘーラクリーデース・ポンティクス：前388頃～前310頃。ポントスのヘーラクレイア出身のアカデーメイア派の哲学者・天文学者で、松原著では次のように説明されている（抜粋）。

前365/364年頃アテーナイへ赴き、スペウシッポスやプラトーン次いでアリストテレースらに師事し、帰国後学校を開いた。研究は多岐にわたり、デーモクリトスの原子論に代わる分子論を説き、コペルニクスを思わせる革新的な地動説（太陽を中心とする惑星の公転と地球の自転）を唱えた点では注目される。･･･（中略）･･･その他、法律・倫理学・歴史・弁論術・自然学・数学・音楽など広い範囲にわたる著作多数があったが、わずかな断片しか存在しない。･･･（以下略）･･･

(30) デーモクリトス：前470/460頃～前371/356頃。ギリシアの哲学者で、「師レウキッポスの原子論を継承発展させて、唯物論の哲学体系を完成したとされる。」ということである。なおデーモクリトスについては本継続研究（19）II.≪原文注記≫の＜注記と考察＞（10）（論文ページ23）を参照のこと。

(31)『アンティドシス（財産交換）』285は下記のとおりである。

285 また必要不可欠（ἀναγκαίων, our practical needs）のことをなおざりにし、古いソフィスト（τῶν παλαιῶν σοφιστῶν, the ancient sophists）の詭弁を珍重する者を称して哲学している（φιλοσοφεῖν, “students of philosophy”）と言い、家（τὸν ἴδιον οἶκον, our own households）と国家（τα κοινὶ τὰ τῆς πόλεως, the commonwealth）といずれをもよく治める学業にいそしむ人びとには目もくれない。しかし、このような学問のためにこそ刻苦して哲学し（καὶ πονητέον καὶ φιλοσοφητέον, of our toil, of our study）、あらゆる努力をつくすべきではないか。諸君はすでに久しく、このような教育（τὴν τοιαύτην παίδειαν, this kind of education）を中傷する者の言説を鵜呑みにして、若者（τοὺς νεωτέρους, our youth）を真に有用なから遠ざけてきたのである。

(32)『アンティドシス（財産交換）』270fが指示されているが、270と271を以下に引いておく。

270 さてこれらの学問については、当面のところ充分に語り、忠告もつくしたが、知恵（σοφίας, “ wisdom”）と哲学（φιλοσοφίας, “philosophy”）については、他の問題で争う人にとってはこの名で呼ばれるものについての論議はそぐわないものとなるが――それらはこの営みと無縁であるから――これに関係して審理にかけられ、またある人びとのいわゆる哲学（φιλοσοφίαν, philosophy）は哲学でないと主張する私としては、正しく哲学と呼ばれてしかるべきものを、諸君のために画定し明示すべきであろう。**271** これについての私の理解は、ある意味でまったく単純なものである。すなわち、人間の本性（τῇ φύσει τῇ τῶν ἀνθρώπων, the nature of man）は、それをもつことによって何を語るべきか、また何をなすべきかを知る知識（ἐπιστήμην, a science）を獲得しうるものでなく、したがって私は残された可能性か

ら結論して、臆断（ταῖς δόξαις, his power of conjecture）によって概してほとんどの場合に最善を狙い当てることのできる者を「知者（σοφοὺς, be wise）」と認め、そのような実践的な智恵（τὴν τοιαύτην φρόνησιν, that kind of insight）が最もすみやかに獲得される学業（διατρίβοντας, the studies）に励む人びとを「哲学者（φιλοσόφους, a philosopher）」とみなしている。

(33)『アンティドシス（財産交換）』271は上記（32）を参照のこと。

(34)『アンティドシス（財産交換）』274は下記のとおりである。なお≪原文注記≫129で引かれている語をゴチにしておく。

274 按ずるに、徳に生まれつき不向きな者（τοῖς κακῶς πεφυκόσιν ἀρετὴν, depraved natures）のうちに克己節制と正義（δικαιοσύνην, honesty and justice）をつくり出す技術（τέχνην, art）は、かつてなかったし、今もない。またそれが可能だと約束した（ὑποσχέσεις, profess）者もいずれ倦み疲れて放言を止め、

(35)『アンティドシス（財産交換）』296は下記のとおりである。

296 さらには、弁論の力（δύνασθαι λέγειν, ability to speak）を最も涵養するものである経験（τὴν ἐμπειρίαν, practical experience）も、アテナイでは誰でも積むことができることが知られている。加えて、言論が標準的で偏りがないこと、また一般に機知（εὐτραπελίαν, flexibility of mind）と言論好き（φιλολογίαν, love of letters）の気風が弁論教育（τὴν τῶν λόγων παιδείαν, the education of the orator）に少なからぬ貢献をしていると考えられている。かくして、弁論の練達者はすべて、わが国に学んだ者であるとみなして不当でない。

(36)『アンティドシス（財産交換）』の274-275が指示されているが、274は上記（34）のとおりである。ここでは275を以下に引いておく。

275 そのような教育が発見される日を迎えることはないだろう。しかしそれでも、以前よりも向上し、より尊重に値する人間になることは可能であり、そのためには巧みに語ることにおいて人にまさろうとし（πρός τε τὸ λέγειν εὖ φιλοτίμως διατεθεῖεν, they conceive an ambition to speak well）、聴衆を説得する能力に憧れ（τοῦ πείθειν δύνασθαι τοὺς ἀκούοντας ἐρασθεῖεν, they become possessed of the desire to be able to persuade their hearers）、加えて、他より多くの分け前（τῆς πλεονεξίας, their advantage）を得ること（といっても愚か者が考えるような貪欲の意味ではなく、真の意味でその力をもつ利得のことであるが）を望むことが、その必要な条件であると私は考えている。

(37) ὑπόσχεσις は「約束」「職業」、ἐπάγγελμα は「約束」「表明、公言」という意味をもつ。また professin は「専門職」の他、「公言、宣言」という意味をもつ。
なお指示されている『パイデイア』Ⅱ，111は、「古代ギリシア」の巻の「 6 都市国家とその正義の理念」の箇所である。

(38)『アンティドシス（財産交換）』275は上記（36）のとおりである。

(39)『ソフィストたちを駁す』21はすでに本継続研究（24）≪原文注記≫46の＜注記と考察＞（56）（論文ページ207 ～ 208）で引いているが、ここで再録しておく。

21 しかしながら、この哲学*（τῆς φιλοσοφίας, this discipline）が課している本来の指令に従おうとする者は、雄弁（ῥητορείαν, oratory）よりもむしろ品性（ἐπιείκειαν,

honesty of character）の涵養の点ですみやかに益を受けるだろう。ここで私が正義（δικαιοσύνη, just living）は教えられる（διδακτόν, can be taught）ものと主張していると誤解してはならない。一般的に言って、生まれつき徳の素地が劣悪な者（τοῖς κακῶς πεφυκόσι πρὸς ἀρετὴν, depraved natures）に克己節制（σωφροσύνη, sobriety）や正義（δικαιοσύνην, justice）を植えつける（ἐμποιήσειεν, implant）技術（τέχνην, an art）はどこにもない。とはいえしかし、徳に向けて何よりの励みとなり助けともなるのは、思うに、政治的弁論（τῶν λόγων τῶν πολιτικῶν, political discourse）を修めることであろう。

*ここに次のような訳注が付されている。

政治弁論のこと。

(40)『ニーコクレース』7はすでに本継続研究（17）≪原文注記≫31の＜注記と考察＞（22）（論文ページ191 ～ 192）で引いているが、ここで再録しておく。

7 正邪美醜についての法を定めた（ἐνομοθέτησεν, has laid down laws）のは言葉であり、そして法なくしては、われわれは共同の生を営むことができない。われわれが悪人を非難し、善人を賞讃するのはこれによる。この法を通してわれわれは無知無学な者を教育し（παιδεύομεν, educate）、思慮のすぐれた者を鑑定する。なぜならわれわれは、しかるべく語ることをすぐれた思慮の最大の証拠とみなすからであり、真実で法にかなった言葉（λόγος, discourse）こそは、信実のすぐれた魂をかたどる似姿なのである。

(41)『アンティドシス（財産交換）』276 ～ 277は下記のとおりである。

276 しかも、それが自然本来の理にかなっていることは、ただちに明らかにできると思う。第一に、賞讃と栄誉に値する弁論（λόγους, discourses）を語り（ὁ λέγειν, speak）、あるいは書く（ἢ γράφειν, write）道を選ぶ人は、題材の選択にあたって、断じて、不正な、あるいは矮小な、あるいは私人の間の約束ごとを取り上げて弁論をこしらえることはなく、壮大で美しく、また人間愛（φιλανθρώπους, the welfare of man）に富み、国家公共（τῶν κοινῶν, common good）に関わる課題を論じるであろう。**277** 第二に、その論題に関係する行為のうちでも、最も適切で有益なもの（τὰς πρεπωδεστάτας καὶ μάλιστα συμφερούσας, the most illustrious and the most edifying）を選びとるだろう。そして日頃からそのような主題を考察し評価している人は、構想中の弁論だけでなく、他の行為に関しても同じように考察評価する力をもつことになるので（οὐ μόνον περὶ τὸν ἐνεστῶτα λόγον ἀλλὰ καὶ περὶ τὰς ἄλλας πράξεις τὴν αὐτὴν ἕξει ταύτην δύναμιν, he will fell their influence not only in the preparation of a given discouse but in all the actions of his life）、知恵と名誉を求めて言論（τοὺς λόγους, the art of discourse）に精魂を傾ける人には巧みに語ること（τὸ λέγειν εὖ, speak well）と思慮（τὸ φρονεῖν, think right）とが同時に兼ね備わることになる。

(42)『アンティドシス（財産交換）』278は下記のとおりである。

278 さらに第三に、説得に心がける人は徳をなおざりにせず、それに最大の注意を払って同胞市民の間で誉れ高い名声を得ようとするだろう。誰もが知るように、評判の高い人物の言論のほうが誹謗されている人物のそれよりも真実であると信用され、生き方（τοῦ βίου, a man’s life）から生まれた信頼は、言葉だけによってつくら

れたそれよりも大きな力をもつ。したがって、聴き手を説得しようと願う人は、その望みの強さに比例して、市民の間で立派なすぐれた人物であるという評判を得るために努力を惜しまない。

(43)『ゴルギアース』の508aが指示されているが、すでに本継続研究（25）≪原文注記≫180の＜注記と考察＞（29）（論文ページ54 ～ 55）で、「読者につよい印象をあたえる部分」として597ｄ～ 508aを引いている。ここでは、508aのなかの直接的に該当する箇所のみを引いておく（ソークラテースの発言の中の一部）。

･･･それどころか君は、なにがなんでも余計に持つ（πλεονεξίαν, self-advantage）ことに努めなければならないと考えている。これもつまりは君が、幾何学（γεωμετρίας, geometry）の勉強をおろそかにしているからなのだ。

(44)『アンティドシス（財産交換）』275は上記（36）のとおりである。

(45) ἔρως は、「（主として男女の）愛」「快楽」「熱望」「欲望」などの意味をもつ。

(46)『アンティドシス（財産交換）』の281以下が指示されている。ここでは、281 ～ 282を以下に引いておく。

281 最後に利得（τὴν πλεονεξίαν, “advantage”）についてだが、これは先に挙げた項目のうち最も論じることの困難なものである。もしも、追い剥ぎや詐欺、あるいはまた何らかの犯罪に手を染めることによって利得が獲得できると思い込んでいる人がいるとすれば、それは錯覚である。生涯を通してみれば、そのような犯罪者より以上に、損失を蒙る者も困窮する者も辱められる者も、また徹底的に悲惨な生を送る者もいない。**282** 最も敬虔で最も神に献身する人が、神々からいまも多く*を授かり、将来も授かり、また家族と同胞市民のために最善をつくして最善の評判を取る人が、人びとから多く*を授かり、将来も授かると信じなければならない。

*小池訳の「多く」は、（πλέον ἔχειν, are better off）と（πλεονεκτήσειν, the advantage）の二つに対応している（ローブクラシカルライブラリーの英訳ではさらにthe better portionも使われている）。

なおイソクラテースは「最後に利得（τὴν πλεονεξίαν, “advantage”）についてだが、これは先に挙げた項目のうち最も論じることの困難なものである。」（『アンティドシス（財産交換）』281）と自己の教養思想を論じていくが、ここで述べられていることは、イェーガーの≪原文注記≫135の、「そこ〔=281以下〕で彼はプレオネクシアー、（勢力、富、重要さなどの）増大（aggrandizement , des Mehrhabenwollens）、の本質の特別な分析を行ない、それ〔=プレオネクシアー〕に肯定的な意味を与えることを試みている。それ〔=プレオネクシアー〕は、根深い人間の本能である、所有したいという衝動である。」という指摘と合わせ、教養思想史の源流における本質的論点として格別に留意しておきたい。イソクラテースは、自らの教養思想として、「（より）多くを授かること」を肯定的に論じているのである。

(47)「彼は以前は彼〔=カルリクレース〕を弁護していたのであるが」は、≪原文注記≫120．の箇所のことを言っている。

(48)『平和演説』33は下記のとおりである。

33 私はひとが次のように思っているのが不思議でならない。敬神や正義に励む人びとが克己してよくそこに踏みとどまるのは、劣悪な連中よりも損することを

覚悟の上であって、それによって神々からも人びとからも他より多く（πλέον, the advantage）を受け取ることが可能になると判断してではない、と。なぜなら、私の確信しているところでは、この人びとだけが多く（πλεονεκτεῖν, advantage）取ってしかるべきものを多く取り、他の人びとはそうしたところで甲斐のないものを多く取っているにすぎないからである。

(49)『平和演説』31は下記のとおりである。

31 まことにある人びとに至っては痴愚もきわまって、不正はなるほど非難されはするが得に（κερδαλέαν, profitable）なり日常の用に益する（συμφέρουσαν, advantageous）ものであり、正義は体裁はよいが損で（ἀλυσιτελῆ, disadvantageous）あり、それをもつ当人よりは他人を益する（ὠφελεῖν, benefiting）ことのできるものだと信じ切っている。

(50)『アンティドシス（財産交換）』282は上記（46）のとおりである。285は上記（31）のとおりである。

(51)『アンティドシス（財産交換）』283は下記のとおりである。

283 しかもこれは真実であり、そのような語り方をすることがこれについては有益なのである。とりわけ昨今、アテナイの国情はさまざまの点で本末転倒して紛糾をきわめ、一部には名前の使い方ひとつでさえ自然本来のあり方に従わず、最も美しい事柄を指すべきものを、人間の最も陋劣な営みに転用する傾向があるのだから。

(52)『饗宴』206aは、ディオティマ（プラトーンの虚構になる女性の名）とソークラテースとの対話の箇所で、205eから以下に引いておく（久保訳、岩波文庫）。

「またたしかにこんな説もあります（と彼女は続ける）、それによると、自分の半身を求める人、それが愛している人なのだというのです。けれども私の説では、エロスの追求するのは半身でもなければ全体でもない、友よ、それが少なくとも同時にちょうど一種の善きものでないかぎりは。その証拠に、人々は自分の足や手さへ、もし自分自身の一部であるそれが自分に有害と感ずれば、進んで切断させるではありませんか。なぜならこの人達銘々が愛着するものは、思うに、必ずしも自己のものではないからです――もとより善きものは自己に固有なるもの、自己のもの、反対に悪しきものは自己に疎きものと名づける者があれば格別ですが。というのは、およそ人間の愛求するものは、善きもの以外には何ものも無いからです。それとも貴方はあると思いますか。」

「ゼゥスの神にかけて、私は思いません、」と私は答えた。

「では簡単に、人間は善きものを愛求する、とこういってしまってはいけないでしょうか。」

「いいですとも」と私は答えた。

「ではいかがでしょう？（と彼女はいった、）人々は善きものを所有することをもまた愛求すると附け加える必要は無いでしょうか。」

「必要がありましょう。」

「それから（と彼女は言葉を続けた）、単にそれを所有することだけではなく、さらに永久に所有することをも、でしょう？」

「それもつけ加える必要があります。」

「では、（と彼女はいった）要するに、愛*とは善きものの永久の所有へ向けられたもの（ὁ ἔρως τοῦ τὸ ἀγαθὸν αὑτῶ εἶναι ἀεί, love loves the good to be one's own for ever）ということになりますね。」

「全く仰っしゃる通りです、」と私は答えた。

*ἔρωςが「愛」と訳されている。『プラトン全集 5 』（岩波書店）の鈴木照雄訳の「饗宴」では「恋（エロース）」と訳されている。

なおἔρωςには、上記（45）で記したように、次のような意味がある。

（主として男女の）愛、pl.情事；快楽、熱望、欲望、情欲

（53）『パイデアイア』II，189には次のような≪原文注記≫64が付されている。

アリストテレース（『ニーコマコス倫理学』9.8）は、真に自己を愛する人間（the man who is truly self-loving, der Mann, der die wahre Selbstliebe hat）（φίλαυτος*）を利己的な人間（the selfish man, dem Selbstsühitigenエゴイスト）の対極として述べている。彼は善い高貴なものすべてを自身自身のために占有し（1168b27, 1169a21）、また彼の自らの真の自己に対する態度は、彼の自分の最良の友に対する態度と同一である。しかし或る人の最良の友とは、その人のためにできる限りのあらゆる善いものを祈る者のことである（1166a20, 1168b1）。この、自己の愛（the love of self, die Philautie）についての理論化は、アリストテレースの倫理学における純粋にプラトーン的な要素のうちの一つである。

*φίλαυτοςには「自己を愛する」「利己的な」という意味がある。

（54）『アンティドシス（財産交換）』286-290は下記のとおりである。

286 実際に諸君が年少者にした教育はといえば、その最も有望な若者に対しては、すぐれた人となる努力を放棄して酒盛りや安逸や遊興にうつつを抜かして齢を重ねること、また性劣悪な若者に対しては、以前には奴隷でもまともな者はためらった放埒にふけることである。**287** 見れば、エンネアクルノスにたむろして葡萄酒を冷やす者、また居酒屋で飲んだくれる者、また別に博打屋で賽子を振る者があるかと思えば、多くは笛吹女の稽古場をうろつく者ばかりではないか。若年の者を憂慮していると言いながら誰も、法廷にこういった所業をそそのかした者どもを訴え出ることなく、そのくせ私には厄介な係争をもちかける。私は、もしほかに何もないとしても、少なくともそのような乱行から弟子たちを遠ざけていることのために感謝されるに値するはずだ。

288 誣告屋という種族は、実にすべての人の敵であり、一方では、二十また三十ムナもの大金を支払って、やがては残りの家産も食いつぶす女を見請けする者がいれば、これを非難するどころか、彼らの散財をともに喜び、他方では、おのれの教育にいくらかでも出費する者を腐敗していると言い張る。学に志す者に対して、これ以上に邪悪な告発はありえない。**289** 彼らは若い盛んな時期にありながら、同じ年頃の大多数が快楽を求めてやまないのに、これに目もくれず、また金を使わなくとも安楽に過ごすことが許されているのに、料金を支払って苦しい修行を選ぶ（εἵλοντο, have elected）。まだようやく少年時代（παίδων, boyhood）を脱したばかりなのに、多くの年長者が知らないことを了知している。**290** すなわち、若い年齢を適正に監視し、人生を美しく開始する（καλὴν ἀρχὴν τοῦ βίου, make the proper start

in life）ためには、その所有物よりも、まず自分自身に配慮し、誰か精神的指導者が見つからないうちは、性急に他人に命令する立場に立とうとしないこと。また、何か幸運に恵まれても、学問によって魂のうちに生じる善（ἀγαθοῖς ὡς ἐπὶ τοῖς ἐν τῇ ψυχῇ διὰ τὴν παιδείαν ἐγγιγνομένοις, the good things which spring up in the soul under a liberal education）と同じように喜んだり誇ったりしないこと。まことに、このような計算をめぐらす者は賞讃されこそすれ、どうして非難の的になるだろうか。同世代のうちで最もすぐれた者、克己節制を身につけた者（σωφρονεστάτους, the most sober-minded）とみなすべきであろう。

（55）『アンティドシス（財産交換）』304は下記のとおりである。

304 もし諸君が節度（σωφρονῆτε, are wise）をわきまえるようになれば、このような混乱に終止符を打ち、哲学（τὴν φιλοσοφίαν, philosophy）に対して敵対するか軽蔑するかに終始する昨今の人びとに同調せず、この魂の配慮（τῶν ἐπιτηδευμάτων τὴν τῆς ψυχῆς, the cultivation of the mind）こそが最も美しく真剣な（κάλλιστον εἶναι καὶ σπουδαιότατον, the noblest and worthiest）仕事であることを認めて、資産（κεκτημένους, means）と余暇（σχολὴν, the time）が充分にある若者にはこのような教養（τὴν παιδείαν, an education）と修練（τὴν ἄσκησιν, a training）を勧めることだろう。

（56）『民族祭典演説』47-50は、本継続研究（26）の≪原文注記≫80.の＜注記と考察＞（32）のとおりである。

（57）『アンティドシス（財産交換）』296は上記（35）のとおりである。

（58）『アンティドシス（財産交換）』の指示されている箇所のうちの296は上記（35）のとおりである。ここでは、293、294、295、297, 302（イェーガーが原文注記で引いている箇所をゴチにしておく）を以下に確認しておく。

293 したがって、教育によって弁論の熟達者が排出することは、世界のすべての人が望んでよいことであるが、とりわけ諸君にそのことが妥当する。というのは、諸君が他国の人びとに先行し優越しているわけは、軍事的配慮によってではなく、また政治制度や父祖伝来の法の遵守によるのでもなく、人間の自然本性（ἡ φύσις ἡ τῶν ἀνθρώπων, the natre of man）が他の動物にまさり、ギリシア民族が異民族にまさるところのもの、すなわち賢慮（τὴν φρόνησιν, wisdom）と言論（τοὺς λόγους, speech）に関して、**294** 他よりすぐれて教育されていることによるのである。それゆえ、諸君がすべての民族にまさるところのまさにその点において、自分も同世代の第一人者となろうと欲する者を堕落していると断罪し、また諸君が他の追随を許さぬところの、ほかならぬその教育（παιδεία, an education）に携わる者を災厄に投げ込むならば、何よりも恐ろしい事態が出来するだろう。**295** というのは、諸君は次のことも忘れてはならないからだ。われわれの国家は言論と教育をよくするすべての人にとって仰ぐべき師表であると評判されているが、それもまたもっともなことであって、現にわが国は、この能力をそなえた者に最大の褒賞を与え、腕を競おうとする者、またそれの鍛錬を望む者には、多数のさまざまの稽古場を提供し、

297 だとすれば、この評判に軽はずみな判定を下して嘲りの的にならぬよう注意すべきであう。この点では、諸君がギリシア人の間で得ている名声のほうが、私が諸君の間で得ているそれよりも高いのだ。不正な判決を下せば、それは諸君が公然

とほなかならぬ諸君自身に下したものとなるからである。

302 彼らのほうが競技者よりもはるかに美しく、アテナイにふさわしい名声を獲得しているからである。**事実、肉体の競技に関しては多くの対抗馬がいるが、教養に関しては世を挙げてわれわれこそが第一人者であると判定するだろう**（περὶ μὲν γὰρ τὴν τῶν σωμάτων αγωνίαν πολλοὺς τους ἀμφισβητοῦντας ἔχομεν, περὶ δὲ τὴν παιδείαν ἅπαντες ἂν ἡμᾶς πρωτεύειν προκρίνειαν. In contests of the body we have many rivals ; but in the training of the mind everyone would concede that we stand first.）。わずかでも理知のはたらく者ならば、このようなアテナイの名が輝く部門で抜群の成果をあげている人びとは公に顕彰すべきであり、嫉妬したり、また彼らについて他のギリシア人と正反対の評価をしたりするものではない。

（59）『アンティドシス（財産交換）』の指示されている297は上記（58）を参照のこと。298は下記のとおりである。

298 あたかも、ラケダイモン人が軍事訓練に怠りない者を罰しようとしたり、テッサリア人が騎馬の術に励む者に刑罰を要求するのにも似たことをすることになるだろう。以上を肝に銘じて、そのような過失を諸君自身について犯さぬよう警戒し、国家を告訴する人間の言論を讃える人間の言論よりも信頼するようなことがあってはならない。

（60）『アンティドシス（財産交換）』の291-319が指示されている。そのうちの293-300, 302, 304はすでに確認してきている。ここでは、312-319を下記に確認しておく。

312 誣告（τὴν συκοφαντίαν, the sycophant's trade）が哲学（τῆς φιλοσοφίας, philosophy）よりも羽振りをきかせ、前者が告発し後者が審理にさらされている現状を、私はまことに嘆かわしいことに思っている。このような事態が知恵にかけては他国の人よりも誇る気持ちの高い諸君のもとで起こることを、いずれの古人が予想したであろうか。**313** われらの父祖の時代にはそのようなことはなかった。ソフィストと呼ばれる人びとに驚嘆し、これと親交を結ぶ者を羨み、対して誣告屋を諸悪の根源とみなしていた。その最大の証拠を挙げると、わが国で最初にソフィストの名を冠せられたソロンが国家の第一人者とみなされていたのに対し、誣告者には他よりも厳しい法律が課せられていた。**314** すなわち、最大の犯罪には一度の裁判で判決を下したが、誣告者に対しては細かく、テスモテタイに提訴する一般の公訴、評議会に訴え出る弾劾、および民会告訴に分けられていたが、それはこの訴訟の術策を駆使する者らが邪悪の限りをつくすことを見ていたからであった。他の犯罪者はその犯罪行為を隠そうとするものだが、**315** 職業的誣告人は、万人の前に野蛮と人間憎悪と喧嘩好きの性根をさらけ出す。

先人もまた、彼らについてはそのように評価を下していたのである。しかしながら、以前の時よりもいまこそ、彼らを憎み斥ける理由は多くある。***316** というのは、当時は彼らが同胞市民に害をなしたといっても、それは狭い日常生活上のことと国家反逆罪に問われることに限られていた。ところが、アテナイが膨張し覇権（τὴν ἀρχὴν, the empire of the Hellenes）を握るとわれわれの父祖はいささか増上慢になって、国を強大にしたすぐれた人士をその権門ゆえに妬み、微賤の出の血気にはやる乱暴な人間を贔屓した。**317** というのも、後者の大胆と喧嘩早い気性こそ民主制

（τὴν δημοκρατίαν, the rule of the people）を守りぬくに充分なものであり、出自の卑しさは傲りの抑制としてはたらくことになって、体制変革を求めたりはしまいと思われたからである。さてこうした変化によって、国家にどのような恐るべき事態が降りかかったか。このような素性の人間が不断に語り、行なわなかったどんな悪事があっただろうか。**318** 市民の間で最も声望高く、国家に善をなす力のある者に対しては、寡頭主義（ὀλιγαρχίαν, oligarchical）、スパルタ贔屓と非難を浴びせ、ついには非難されているとおりの者になる*[2]ことを強いるまで罵倒をやめなかった。他方、同盟国に対しては苛酷な条件を突きつけ、偽りの告発をして*[3]最もすぐれた人材を追放せしめ、ために彼らはわれわれから離反してラケダイモンとの友好同盟を求めたのではなかったか。**319** これによってわれわれは戦争*[4]に突入し、あるいは戦死し、あるいは敵に寝返り、あるいは日々の生活に困窮する市民の多くを目の当たりにした。さらには、民主制（τὴν δημοκρατίαν, the democracy）が二度までも転覆し、父祖伝来の城壁が破壊され、あげくは国家全体が奴隷化される危険に瀕し、*[5]アクロポリスも敵の占領するところとなった*[5]のである。

* には次の訳注がある。

これ以降、誣告人が民衆煽動家と同一に扱われる。

*[2]には次の訳注がある。

とくにアルキビアデスが念頭にあると思われる。

*[3]には次の訳注がある。

『パンアテナイア祭演説』13，142を参照。

*[4]には次の訳注がある。

ペロポネソス戦争。

*[5]には次の訳注がある。

30人政府の時代、スパルタ駐屯軍がアクロポリスを占拠していた。

（61）『アンティドシス（財産交換）』の指示されている299-301のうち299，300はすでに本継続研究（17）≪原文注記≫－**4 君主の教育**－15の＜注記と考察＞（4）（論文ページ182）で引いているが、イェーガーの論述を理解するために再掲する。

299 思うに、諸君が知らぬはずはない、ギリシアの国々の一部は諸君に敵対し、一部はことのほかに友好的で安全の希望を諸君に託している。そして後者は言う、「アテナイのみが都市国家（πόλιν，city）であり、他は村（κώμας，villages）にすぎない。アテナイこそはその規模によっても、各地に供給する物資の豊富によっても、またとりわけ住民の気質によっても、ギリシアの首都と呼ばれるのが正当である。**300** なぜなら、これほどに穏やかで（πραοτέρους，more kindly）私心のない人びとはない、生涯これほど親密にともに過ごせる人びとはいない」と。彼らはこのように大そうな誇張に走り、平気で次のようなことさえ口にする。曰く、アテナイの立派な人物の手で報復されるほうが、他国の野蛮を介して恩恵を受けるよりも快い、と。他方にはしかし、このような見解を嘲笑し、誣告屋の苛烈と悪辣に詳しく立ち入って、アテナイの国家全体が野蛮で苛酷（χαλεπῆς，insupportable）であると告発する人びとがいる。

301は下記のとおりである。

301 したがって、正気の分別ある（νοῦν ἐχόντων, intelligent）裁き手たる者は、このような非難の原因をつくっている者どもを国家に大いなる恥辱を塗るものとして死刑に処し、国家について語られる賞讃にいくぶんなりとも貢献した者については、栄冠を争う競技の勝利者よりも高い名誉を与えなければならない。

（62）『アンティドシス（財産交換）』306-308は下記のとおりである。

306 諸君は、国家と祖父たちが成し遂げた事蹟のいかに美しく、偉大なるものであったかを想起して、自らに語り聴かせつつ、その人となり、生まれ、教育がいかようなものであったかを、まず僭主（τοὺς τυράννους, the tyrants）を追放して民衆を旧に復し民主制（τὴν δημοκρατίαν, our democratic state）を確立した人*から始めて、検討しなければならない。そしてマラトンの一戦でペルシアを打ち破り、これによって国家に栄誉をもたらした人*[2]について、**307** またこの後を継いで、ギリシアを隷従の軛から解放し（ἐλευθερώσας, liberated）、それによって獲得した指導と支配（τὴν ἡγεμονίαν καὶ τὴν δυναστειαν, the leadership and power）の地位を祖父に与え、さらにペイライエウスの地勢を憂慮して、ラケダイモン人の不服をものともせず長壁を国家にめぐらした人*[3]、次にまたこの人の後に、アクロポリスを金銀で満たし、庶民の家を繁栄と富で潤した人*[4]は、いかなる人物であったか。**308** 彼ら一人一人を吟味すれば、誣告を生業としている者（τοὺς συκοφαντικῶς, who lived unscrupulously）も、ぼんやりとその日暮らしをしている者も、また多数者に埋没している者も誰ひとり、これらの赫赫たる業績を挙げるものでなく、生まれ（ταῖς εὐγενείαις, birth）と名声（ταῖς δόξαις, reputation）においてのみならず、思慮（τῷ φρονεῖν, wisdom）と弁論（λέγειν, eloquence）とにおいても傑出した人びとだけがこれらすべての善のもとをなしたことが、おのずから分明になるであろう。

* には次の訳注がある。

クレイステネス。前出232節を参照。

*[2]には次の訳注がある。

ミルティアデス。

*[3]には次の訳注がある。

テミストクレス。前出233節を参照。

*[4]には次の訳注がある。

ペリクレス。前出234節を参照。

（63）『ピリッポスに与う』8-9は、すでに本継続研究（23）Ⅱ．9の＜注記と考察＞（10）（論文ページ134）で引いている。しかしイェーガーの論述において重要な意味をもっているので、ここでは7を含めて確認しておく。

7 このような提議を多くの言葉を費やして述べたところ、聴く者はこの論説が世に広まれば、双方とも戦いの鉾を納め、自らの非力を悟って双方に共通の善を慮るだろうと希望を抱いた。さて、彼らの期待が愚かであったか分別に富むものであったかは、彼ら自身の胸に聞けばよい。それはともかく、私がこの論題にかかっている最中に、貴下ならびにわが国は和平を締結して、私の論説の完成に先んじた。まことに賢明な処置である。どのようにであれ平和（τὴν ειρήνην, the peace）を実現す

る方が、戦争（τὸν πόλεμον, the war）によって生じる不幸に苦しみ続けるよりはるかによいのだから。

8 私は、和平をめぐって採択された決定を喜び、これがわれわれのみならず貴下をはじめ全ギリシアに恩恵をもたらすだろうことを認めたものの、引き続いて起こるであろう事態から心を逸すことができず、ただちに対策の検討を思い立った。いかにすればこの平和は維持されるか、またわが国は遠からずしてこの決定を放棄し、あらためて別の戦争を欲するかもしれないが、これを防ぐにはどうすればよいか。

9 これについて熟考したすえに私は次の結論を得た。アテナイが平和を守る条件はただ一つ、ギリシアの諸大国が相互の敵対を解消して戦いをアジアに転じることを決定し、いまギリシア同胞から奪って当然とみなしている利得は、ギリシアの外から取るようにする以外にない。これはかつて『民族祭典演説』で私が勧告したことにほかならない。

（64）イソクラテース「書簡集」2.15. は「書簡 2. ピリッポスへ, Ⅰ」の一部である（邦訳はない）。

（65）『パンアテーナイア祭演説』の2-4が指示されているが、イソクラテースの文意を正確にとらえるために、ここでは1を含めて引いておく（多くの訳注は略すが一か所のみ引いておく）。

1 少壮の頃のわたしは神話伝説の類を避け、多くの人びとがかえって彼ら自身の安寧をはかる論説よりも喜ぶところの怪奇や虚妄の言を斥け、また古のギリシア人の功業や戦いも正当に讃美されてしかるべきことを認めこそすれ、著述の主題に取ることはなく、さらにまた平明な語り口、技巧を排した文章は、法廷訴訟の猛者たちが初心者に勧めて、**2**「いやしくも反対陣営に対して有利に闘わんとするならば習熟すべくんばあらず」と説くところのものであるが、それもわたしの選ぶ道でなく、これらすべてをよそにまかせて、あのような論説に鋭意努力したのである。すなわち、わが国をはじめギリシア諸国の利益をはかる政策を進言し、その文章にはふんだんに考想を盛りこみ、少なからぬ対置法、等長文節分節法（ἀντιθέσεων καί παρισώσεων, contrasted and balanced phrases）またその他演説に光彩をそえ、聴衆に拍手喝采をしいる修辞形式（ταῖς ῥητορείαις, the other figures of speech）を取り入れたのだ。がしかし、今はもうそういった演説を完全に放棄した*。

3 考えてみれば、わたしのように94の歳を数える者が、またそもそも髪もすでに白くなった者がそのような語り方を続けるのは不似合いであり、それよりは誰でも意欲さえあれば可能な、ただ労を惜しまず精神を集中する人でなければ難しい語り方をすべきであろう。

4 このような前置きをしたのはほかでもない、これから披露する論説が以前に公にされたものよりも弱々しく思われたとしても、かつての文辞の華麗と比較せず、いまこの場にふさわしいとわたしが認めた主題に照らして判定していただきたいのである。

*ここに次のような訳注が付されている。

これは誇張で、たしかに過度の修飾は減ったものの、本著作にも上述の技法が駆使されている。

（66）『パンアテーナイア祭演説』270は下記のとおりである。

270 しかし彼らが遠慮なしに言ったことについては同感であったので、わたしは説得に応じ――これについてくだくだしい説明はいらないだろう――残りの仕事にとりかかった。齢は百に三つ足りないだけで、衰弱は甚だしく、他の人ならば論説を書こうと試みるどころか、他人が骨折って示すものを聴くことすらしなかったであろう。

（67）『パンアテーナイア祭演説』3 は上記（65）のとおりである。

（68）『パンアテーナイア祭演説』30-33は下記のとおりである。なお33は本継続研究（26）Ⅱの≪原文注記≫82の＜注記と考察＞（35）ですでに引いている。

30 では、技術（τὰς τέχνας, the arts）と知識（τὰς ἐπιστήμας, sciences）と特殊能力（τὰς δυνάμεις, specialities）からその資格を剥奪してわたしは、いかなる人を教養人（καλῶ πεπαιδυμένους, educated）と呼ぶのか。第一に、それは日ごとに生起する問題をてぎわよく処理し、時機を的確に判断し（τὴν δόξαν, possess a judgement）、ほとんどの場合において有益な結果を過たずに推測することのできる人である。*[1]**31** 第二に、周囲の人びとと礼儀正しく信義にもとることなく交際し（ὁμιλοῦντας, in their intercourse）、他人の不躾や無礼は穏やかに機嫌よく迎え、自分自身はできるだけ柔和に節度を保って（μετριωτάτους, reasonable）相手に接する人である。さらに第三に、つねに快楽（ἡδονῶν, their pleasures）に克ち*[2]不運にひしがれることなく*[3]、逆境にあっても雄々しく人間性（τῆς φύσεως, our common nature）にふさわしく振る舞う人である。**32** そして第四に最も大事な点であるが、成功に溺れて有頂天になったり傲岸に走ったりすることもなく、*[4]思慮にすぐれた人の隊列に踏みとどまり、生来のおのれの素質（φύσιν, nature）と知慮（φρόνησιν, intelligence）が生みだす成果を喜ぶ以上に、僥倖を歓迎することのない人である。これらの一つだけでなく、すべてに魂のありようを適合させている人（πρὸς ἅπαντα ταῦτα τὴν ἕξιν τῆς ψυχῆς εὐάρμοστον ἔχοντας, those who have a character which is in accord）、これをわたしは思慮に秀でた（φρονίμους, wise）完全な（τελέους, complete）人、すべての徳（τὰς ἀρετάς, all the virtues）をそなえた人と言うのである。

33 教養人（τῶν πεπαιδευμένων, educated man）についてわたしの知るところは以上である。次に、ホメロス、ヘシオドスならびにその他の詩人の作品については、語りたい気持ちは強くあるのだが（というのもリュケイオンで彼らの詩を朗読し、それについてたわごとを並べる人びとを黙らせることができると思うから）、しかし序論に割り当てられた分量を大幅に超過することになりそうである。

*[1] には次のような訳注が付されている。

『ソフィストたちを駁す』3,16,17、および『アンティドシス』184,271を参照。

*[2] には次のような訳注が付されている。

『デモニコスに与う』21、『ニコクレスに与う』29を参照。

*[3] には次のような訳注が付されている。

『デモニコスに与う』42を参照。

*[4] には次のような訳注が付されている。

後出196節、197節を参照。

Received：August, 8, 2023
Accepted：November, 1, 2023